269
〈462〉

高崎市文化財調査報告書第269集

下大類・中道下遺跡

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2010

高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書第 269 集

下大類・中道下遺跡

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2010

高崎市教育委員会

例　言

1．本書は集合住宅建設に伴い実施された、「下大類・中道下遺跡」（高崎市遺跡番号 462）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本遺跡の所在は、群馬県高崎市下大類町字中道下 524 番地 1 である。

3．発掘調査は、平成 22 年 1 月 6 日から平成 22 年 1 月 26 日まで実施した。

4．発掘調査及び整理作業は、高崎市教育委員会の指導・監督の下に、事業者と委託契約を結んだ株式会社シン技術コンサルが実施した。

5．調査体制は以下のとおりである。

高崎市教育委員会	株式会社シン技術コンサル
田口一郎	調査担当　福嶋正史
角田真也	測量担当　志村将直
須山奈保子	

6．本書の編集は福嶋・坂本勝一・荒井　洋（株式会社シン技術コンサル）が行った。執筆は第 1 章を田口、他を福嶋が行った。

7．本調査における図面・写真・遺物は、高崎市教育委員会で保管している。

8．発掘調査及び報告書作成に従事した作業員は以下の通りである。（敬称略・五十音順）

青山真佐子、大野和代、大村美枝子、岡田　勝、小渕光弘、小泉清子、斉藤昭夫、斉藤千恵子、櫻井敏江、佐藤久美子、佐藤貞夫、関口裕子、高橋孝子、高八卦幸夫、中里洋子、野村　猛、畠中　朋、原口由美子、廣瀬康之、馬淵恵美子、丸橋律子、森　鐵、山田千鶴子、大和律子

9．発掘調査の実施および本書の刊行にあたり、下記の方々・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。（敬称略）

山下工業株式会社、細谷印刷有限会社、株式会社トラスト技研、梅澤重昭

凡　例

1．本書掲載図に使用した地図は、第 1 図が国土地理院発行 1/50,000 地形図『高崎』・『前橋』、第 2 図が高崎市発行 1/2,500 都市計画図、第 5 図が国土地理院発行 1/25,000 地形図『高崎』・『前橋』である。また、第 4 図は「日本地質学会第 100 年学術大会講演要旨」に使用された図を改変したものである。

2．遺構配置図の座標については、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用した。また、遺構平面図に示した方位は、座標北である。

3．土層の色調は『標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所色票監修 2005 版）による。

4．火山噴出物の表記は略号を用いた。浅間 A 軽石 =As-A、浅間 B テフラ =As-B、浅間 C 軽石 =As-C、浅間板鼻黄色軽石 =As-YP、榛名二ッ岳渋川テフラ =Hr-FA、榛名二ッ岳伊香保テフラ =Hr-FP である。

5．遺構の表記は略号を用いた。溝 =SD、井戸 =SE、土坑 =SK である。

6．写真図版における遺物写真の縮尺は、遺物実測図と同一とした。

目　次

例　言
凡　例
第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　調査の方法と経過 …… 2
第Ⅲ章　遺跡の立地と環境 …… 4
第１節　地理的環境 …… 4
第２節　歴史的環境と周辺の遺跡 …… 4
第Ⅳ章　基本層序 …… 9
第Ⅴ章　検出された遺構と遺物 …… 10
　第１節　溝 …… 10
　第２節　井戸 …… 19
　第３節　土坑 …… 20
　第４節　ピット …… 25
　第５節　遺構外出土遺物 …… 25
第Ⅵ章　まとめ …… 31
写真図版
抄　録

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　調査区位置図 …… 2
第３図　グリッド配置図 …… 3
第４図　高崎地質断面図 …… 4
第５図　周辺の遺跡 …… 6
第６図　基本土層柱状図 …… 9
第７図　遺跡全体図 …… 11
第８図　SD1及び出土遺物 …… 13
第９図　SD2・4 …… 14
第10図　SD2出土遺物 …… 15
第11図　SD3 …… 16
第12図　SD3出土遺物 …… 17
第13図　SD4出土遺物 …… 19
第14図　SE1 …… 20
第15図　SK1・2及び出土遺物 …… 21
第16図　SK3～6及び出土遺物 …… 23
第17図　ピット全体図 …… 24
第18図　ピット出土遺物 …… 25
第19図　遺構外出土遺物(1) …… 25
第20図　遺構外出土遺物(2) …… 26

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表(1) …… 7
第２表　周辺遺跡一覧表(2) …… 8
第３表　ピット観察表 …… 27
第４表　出土遺物観察表(1) …… 27
第５表　出土遺物観察表(2) …… 28
第６表　出土遺物観察表(3) …… 29
第７表　出土遺物観察表(4) …… 30

写真図版目次

PL.1　調査区全景、調査区遠景
PL.2　調査前現況、調査区全景、基本土層、SD1、SD2・4、SD1・2・4、SD2遺物出土状況、SD3
PL.3　SD3遺物出土状況、SE1、SK1、SK2、SK3、SK4、SK5、SK6
PL.4　SD1出土遺物、SD2出土遺物
PL.5　SD3出土遺物
PL.6　SD4出土遺物、SK1出土遺物、SK2出土遺物、SK3出土遺物、P11出土遺物、遺構外出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯

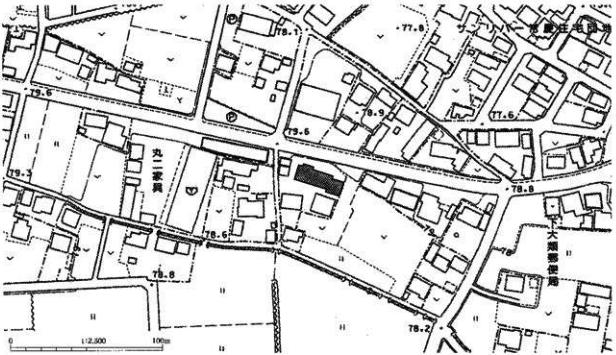
平成21年8月、山崎好江氏（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に、下大類町に計画する集合住宅建設予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、当該地が古墳～中近世に至る散布地として遺跡台帳・地図に登録された埋蔵文化財包蔵地であり、北側の近隣地の下大類蟹沢遺跡では、当該期の集落遺跡が発掘調査されているため、工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年9月17日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年12月1日に工事予定地の試掘調査を実施し、古墳～平安時代の遺構を確認した。

試掘結果を受けて、埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、建設予定の変更は不可能ということなので、文化財保護法第93条第1項の規定による届出に対する回答で、記録保存の発掘調査が必要であると指示を出した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、株式会社シン技術コンサルに委託して実施することとなり、平成21年12月18日付けで高崎市長・事業者・シン技術コンサルの三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成21年12月21日付けで事業者とシン技術コンサルの二者で発掘調査委託契約が締結された。

第1図　遺跡位置図



第２図　調査区位置図

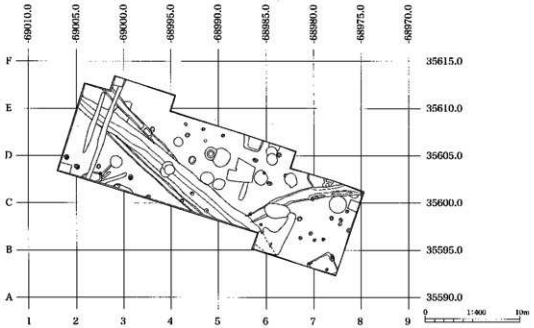
第Ⅱ章　調査の方法と経過

今回の調査は、集合住宅の建物部分にあたる 314.37㎡を調査対象とした。

現地表から黒色土層（Ⅳ層）上面までの土層はバックホウによって掘削、除去し、これらの層中にあった近～現代の攪乱も同時に掘削した。黒色土層上面をジョレン等で精査して遺構検出作業を行った結果、暗褐色砂質シルトで埋没した溝跡（SD1）が検出された。また、As-A を含有する砂質シルトで埋められた、近世以降とみられる円形の抛り込みや溝状の掘り込みも複数認められた。これらを調査した後、更に人力で黒色土を褐色土層（Ⅴ層）上面まで段階的に掘削、精査して遺構検出を行った。褐色土層上面では、溝跡（SD2～4）や土坑（SK1～6）、井戸跡（SE1）、ピットが検出されたため、主として移植ゴテを用いてこれらの遺構を掘削、調査した。確認された全ての遺構について調査が終了した後、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と地上から調査区全景写真の撮影を行った。

作図作業については、上層断面図は従来通りレベルを使用して実測し、方眼紙上に図化した。遺構、及び調査区の平面図はトータルステーションを使用して計測し、遺物出土状況図については器械測量と写真実測を併用し、どちらもコンピュータ上で図化・編集した。写真記録は 35mm モノクロネガ・同カラーリバーサルフィルムの２種類を使用したが、特に、調査区全景写真の撮影には 6×6 判カラーリバーサルフィルムを、また、空中写真には 6×6 判モノクロネガ・同カラーリバーサルフィルムを使用した。なお、補助的にデジタルカメラでも撮影を行った。

調査区には、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を用いたグリッドを設定した。グリッドの基点は調査区外南西の X=35590.0、Y=-69010.0 の交点とし、基点から５ｍ×５ｍを１グリッドとして南北方向にアルファベット（A～F）、東西方向に数字（1～9）を付した（第３図）。各グリッドは南西交点を基準とし、交点名（A1、B2･･･）をグリッド名とした。



第３図　グリッド配置図

調査の経過は、以下に掲げる。

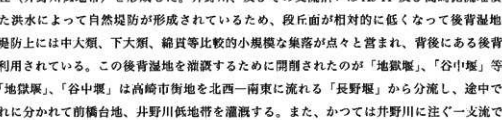
平成 22 年

1 月 6 日	機材搬入。表土掘削、及び黒色上上面での遺構検出作業を開始。
1 月 7 日	黒色土上面での遺構検出作業を継続。
1 月 8・12 日	黒色土上面で検出された遺構の掘削、調査を行った。
1 月 13 ～ 15 日	黒色土を褐色土層上面まで掘削。併行して遺構検出作業を行った。
1 月 18 ～ 21 日	褐色上上面で検出された遺構の調査を行った。21 日までに全ての遺構について掘削作業終了。
1 月 22 日	ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と調査区全景写真撮影を実施。その後、遺構計測を行った。
1 月 26 日	遺構計測の補足を行い、計測作業終了。機材を搬出して調査終了した。

第Ⅲ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

本遺跡が所在する下大類町は旧高崎市域東部にあって、現市内を北西―南東に貫く井野川の右岸の一角を占める。本遺跡は同町西部の標高約 79 m の地点に位置し、井野川からは南へ約 200 m 離れている。同町を含めた旧高崎市域東半は、２～2.4 万年前に浅間山が山体崩壊して発生した前橋泥流を基盤とする前橋台地上に立地する。台地の大部分では、泥流層を榛名山や浅間山等が噴火した際の噴出物が覆って現在の地形を形成しているが、井野川右岸では更に As-YP 上位に高崎泥流層が数メートルもの厚さで堆積して現地形を形成している（第４図）。前橋泥流堆積以後、井野川は前橋台地を下刻して、その下流域を倉賀野台地と前橋玉村台地に二分するとともに、右岸に於いては 0.8 ～ 1.2km 西方を流れる柏川との間に比高差２～３ m の河岸段丘（井野川低地帯）を形成した。井野川、及びその支流沿いは As-YP 及び高崎泥流堆積以後に繰り返された洪水によって自然堤防が形成されているため、段丘面が相対的に低くなって後背湿地化している。自然堤防上には中大類、下大類、綿貫等比較的小規模な集落が点々と営まれ、背後にある後背湿地は水田として利用されている。この後背湿地を灌漑するために開削されたのが「地獄堰」、「谷中堰」等の用水路である。「地獄堰」、「谷中堰」は高崎市街地を北西―南東に流れる「長野堰」から分流し、途中でいくつもの細い流れに分かれて前橋台地、井野川低地帯を灌漑する。また、かつては井野川に注ぐ一支流であった一貫堀川も、現在では改修されて、井野川へ直接つながる一貫堰放水路（五貫堰）と一貫堀川本体に分岐しており、後者は更に「仏供堰」に分流して「地獄堰」と結ばれる。本遺跡は旧一貫堀川と井野川の合流点に発達した微高地の端に位置しており、南方には「地獄堰」を挟んで広大な後背湿地が広がっている。



第４図　高崎地質断面図

第２節　歴史的環境と周辺の遺跡

本遺跡の所在する井野川下流域右岸では、上記の通り As-YP を高崎泥流が厚く覆っているため、旧石器時代の遺構は未だ発見されていない。遺物は、烏川沿いの岩鼻坂上北遺跡で後期旧石器時代終末期の尖頭器が１点出土しているのみである。

市内で発見された縄文時代の遺跡のうち、最も古いものは市内南西部の剣崎長瀞西遺跡である。縄文草創期の爪形文系土器と多縄文系土器が出土（黒田 2003）しており、群馬県内でも最古級のものである。本遺跡周辺では元島名瓦井遺跡（25）で出土した草創期の石器が最古の資料であり、以後縄文前期に至るまで遺跡・遺物は発見されていない。縄文前期の遺物は下斉田遺跡、滝川Ｃ遺跡、宿大類村西遺跡（9）、柴崎村間遺跡（50）で出土しており、中期～後期前半には、高崎情報団地Ⅱ遺跡（23）、万相寺遺跡（21）等で集落が形成されている。なお、後期後半～晩期の遺跡・遺物は、高崎情報団地Ⅰ遺跡（22）以外確認されていない。

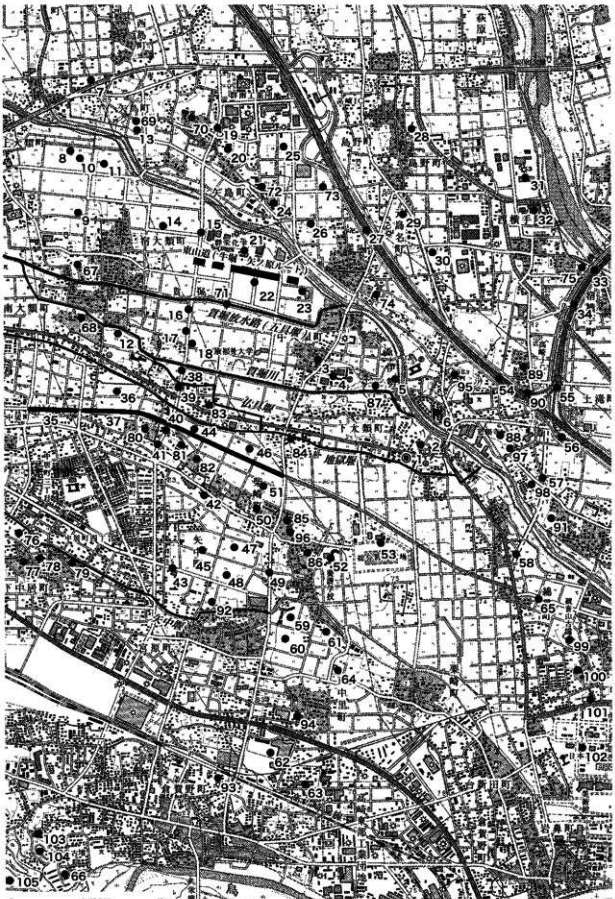
弥生時代の遺跡では、鈴ノ宮遺跡（24）において中～後期の住居跡26軒、前方後方形を含む方形周溝墓7基、甕棺墓1基が調査されたことが特筆される。このほか、元島名遺跡（26）では方形周溝墓と甕棺、高崎情報団地Ⅰ遺跡や宿大類村西遺跡ではいずれも後期の方形周溝墓と住居跡、万相寺遺跡では同じく後期の住居跡12軒が検出されている。これらの遺跡は井野川左右両岸にあるが、旧一貫堀川合流点より上流に位置するという点で共通する。後期になると規模の大きい集落が形成されるとともに集落数自体も増加するが、井野川流域の低地帯周辺から遺跡は発見されていない。

井野川流域は群馬県における古墳文化初現の地とみられており、古墳時代最古期の土器が出土した柴崎熊野前遺跡（52）、熊ノ堂遺跡、また、県内最古の古墳と考えられている元島名将軍塚古墳（95）、共に井野川流域に位置している。この古墳は系譜上孤立しているが、後続する古墳時代前期半ば頃に築造されたと考えられている古墳の一つに、「□（正）始元年」銘の三角縁四神四獣鏡が出土した柴崎蟹沢古墳（96）がある。この鏡は、同型鏡が山口県竹島御家老屋敷古墳と兵庫県茶尾古墳、更に奈良県桜井茶臼山古墳から出土している。この後、古墳時代中期から終末期にかけては、高崎情報団地Ⅰ遺跡の帆立貝形古墳を中心とした初期群集墳や、5世紀代に相次いで築造されたとみられる普賢寺裏古墳（100）、岩鼻二子山古墳（102）、不動山古墳（101）、6世紀後半に築造された綿貫観音山古墳（99）等の大型前方後円墳とそれを中心とした綿貫古墳群等、井野川左右両岸に大小の古墳が競い合うように築造されるようになる。また、古墳以外では、弥生時代～古墳時代中期の集落、及び墓域が発見された高崎情報団地Ⅰ遺跡や、As-C降下からHr-FP降下までの期間の水田跡が調査された（斎藤2002）上滝榎町北遺跡（55）を代表として、井野川右岸では中大類金井遺跡（3）、中大類金井Ⅱ遺跡（4）、下大類遺跡（53）、綿貫遺跡（65）等の集落遺跡が、また、左岸では上滝五反畑遺跡（56）、宿横手三波川遺跡（34）、西横手遺跡群（33）等の水田跡遺跡が形成されている。

奈良・平安時代は、7世紀末と考えられる「辛己歳」の銘がある山ノ上碑をはじめとしたいわゆる上野三碑のほか、土器への墨書や刻書、文字瓦、漆紙文書等の形で文字資料が出土している。本遺跡周辺では、矢中村東A遺跡（59）で天仁元年（1108）の浅間山噴火に伴うAs-B下の遺構から「物部私印」と彫られた銅印が、また、鈴ノ宮遺跡では「大□伴」銘の文字瓦がそれぞれ出土している（前掲　飯塚ほか1978）。また、7世紀後半から東山道駅路が整備され、何回かの改修とルート変更を経て9世紀頃まで使用されていたとみられている。その中の一つである「牛堀・矢ノ原ルート」が、高崎情報団地Ⅰ遺跡で7世紀の古墳を乗り越えて造成されているのが見つかっている。この時期の遺跡として、集落とともにAs-Bに埋まった水田跡が広範囲で確認されている。本遺跡周辺では柴崎町・矢中町の粕川沿いに分布する複数の遺跡でAs-B下水田跡が調査され、その多くが条里制の区画に則っていることから、律令期の同制度施行に伴って大規模な水田開発が行なわれたことを示している。ただ、文献史料からは、As-B降下以前の9世紀後半～10世紀には上野国では争乱や自然災害等によって生産が不順となっていた様子が窺え、更にAs-B降下によって壊滅的な被害を被っている。

中世以降、本遺跡周辺では土着の有力氏族や外来支配者によって館や城が各所につくられる。最も古いものは南北朝期まで遡ると推定される上滝中屋敷（90）であり、鎌倉攻めに参加した武将の屋敷と考えられる（長井・神戸1997）塚ノ越屋敷（71）、室町期の柴崎桜井屋敷（82）、下滝館（91）、慈眼寺（88）等がこれに続く。その後、和田氏によって永禄年間（1560年代）に築城され、天正18年（1590）にかけて使用された大類城（67）や、同時期の矢島西城（69）をはじめとして、戦国期に多数の城館が構築されている。なお、大類館（68）も現存する地割りからは戦国期と思われるが、付近に残る「館（たて）」の地名から、平治の乱（1159）に参戦した大類太郎の居所を改修したものと考える意見もある（山崎1971）。

近世になると、現宿大類町から滝川町にかけて天狗岩用水（現滝川）が開削され、水田が安定して営まれるようになった様子が、上滝町榎町北遺跡、五反畑遺跡等で確認されている（岩崎・熊谷2001A・B）。天



第5図　周辺の遺跡

明3年(1783)のAs-A降下後には、As-B降下時にはみられなかった復旧溝が無数に構築されていることから、それを可能とするだけの「基礎体力」が培われていたことを示している。ただし、農民全般の生活が楽であったわけではなく、明治初期の「五万石騒動」を経て税制が改正され、農民の負担が一応軽減されるまで、農民は収益の不安定な土地と重い租税に苦しんでいたようである。

第1表　周辺遺跡一覧表（1）

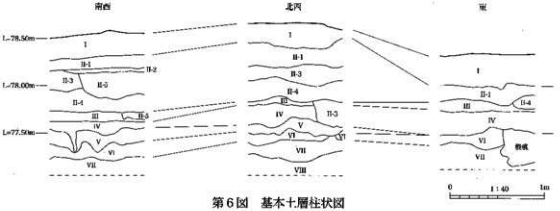
No.	遺跡名	主な時代	主な遺構	報告書・文献等
1	下大垣・中道下遺跡	古墳～古代	古墳検出溝・土坑、古代溝	—
2	下大垣屋敷遺跡	縄文～古代	古墳、古墳住居、古代住居	1992年遺跡調査会報告書刊行
3	中大垣金井遺跡	縄文～中世	古墳住居、古代住居	1988年市教委報告書刊行
4	中大垣金井II遺跡	古墳～古代	古墳住居、古代住居・溝	1991年遺跡調査会報告書刊行
5	中大垣堀貝遺跡	古墳～古代	古墳住居、古代住居	1988年市教委報告書刊行
6	八角名下西原遺跡	縄文～古代	古墳住居、古代住居	1992年遺跡調査会報告書刊行
7	新保八坂遺跡	古代	B下水田	新編「高崎市史」資料編2
8	天田・川岸遺跡	古代・中世	古代住居・掘立・水田、中世溝・掘立・井戸	1983年市教委報告書刊行
9	岩大垣村西遺跡	縄文～中世	縄文～古代住居、方形周溝墓、大垣城	1987年市教委報告書刊行
10	天田遺跡II	古代・中世	B下水田、古代住居、城館	1984年市教委報告書刊行
11	村北・矢島前・村東遺跡	縄文・弥生・古代・中世	B下水田、古代住居、館跡	1985年市教委報告書刊行
12	南大垣打南遺跡	古代～近世	古代住居、中世墓跡	1994年市教委報告書刊行
13	矢島村西・海蔵遺跡	縄文・古墳～古代	縄文住居、古墳住居、古代住居、城館	1986年市教委報告書刊行
14	山高・天神遺跡	縄文・古代	縄文住居、古代住居、B下水田	1984年市教委報告書刊行
15	天神久保遺跡	縄文・古代	古代住居、B下水田	1985年市教委報告書刊行
16	南大垣東神遺跡	弥生・古代	方形周溝墓、B下水田	1997年市教委報告書刊行
17	南大垣稲荷遺跡	縄文～古代	古墳住居、古代住居、B下水田	1997年市教委報告書刊行
18	南大垣東神・稲荷遺跡	弥生～古代	方形周溝墓、古墳住居、B下水田	1997年市教委報告書刊行
19	矢島竹ノ内遺跡	弥生～古代・近世	方形周溝墓、弥生住居、弥生墓構墓、古代上坑	1988年市教委報告書刊行
20	矢島町笠懸遺跡	弥生～古代・中世	弥生住居、古墳住居	1994年市教委報告書刊行
21	万福寺遺跡	縄文～中世	縄文住居、弥生住居、古墳住居、古代住居、B下水田	1985年市教委報告書刊行
22	高崎情報団地II遺跡	縄文～中世	縄文住居、弥生住居、古墳住居、古墳、古代住居、B下水田	1997年遺跡調査会報告書刊行
23	高崎情報団地III遺跡	縄文～中世	縄文住居、弥生住居、古墳住居、古墳、古代住居、B下水田	2002年市教委報告書刊行
24	熊ノ谷遺跡	弥生～中世	弥生住居、前多坡方形周溝墓、古墳住居、平安住居	1978年市教委報告書刊行　豊春相談歴
25	元島名延井遺跡	縄文～古墳～中世	炭焼窯、B下水田	1995年遺跡調査会報告書刊行
26	元島名遺跡	弥生～中世	円形周溝墓、方形周溝墓、畿館	1979年市教委報告書刊行
27	元島名B遺跡	中世	掘立柱建物、堀	1977年県事業調査報告書刊行
28	島野村東遺跡	古代	B下水田	1988年市教委報告書刊行
29	元島名西原B遺跡	古代	B下水田	1992年市教委報告書刊行
30	島野中町遺跡	古墳～中世	FA下水田、B下水田、中世島	1992年市教委報告書刊行
31	西横手遺跡(II)	古墳～古代	FA下水田、B下水田、溝	1996年市教委報告書刊行
32	西横手遺跡(I)	古墳～中世	周溝墓、FA下水田、B下水田、中世島	1989年市教委報告書刊行
33	西横手遺跡群	古墳～中世	FA下水田、FP下水田、古代住居、城館	2000年県事業調査報告書刊行
34	宿横手二渡川遺跡	古墳～近世	FA下水田、FP下水田、B下水田、中世島、近世墓	2000年県事業調査報告書刊行
35	駅東口遺跡II・III遺跡	古墳～近世	古代住居、B下水田	1993年市教委報告書刊行
36	西坪・柳原・吹手西B遺跡	古代	B下水田、水路	1987年市教委報告書刊行
37	駅東口遺跡I遺跡	古墳～近世	古代住居、B下水田	1987年市教委報告書刊行
38	柴崎遺跡群V	古墳～古代	古墳住居、古代住居	1988年市教委報告書刊行
39	柴崎吹手B・吹手西D遺跡	古墳～古代	古墳、古墳住居、B下水田水路、B下水田	1998年市教委報告書刊行
40	西浦・中人・吹手西遺跡	古墳	方形周溝墓、溝	1992年市教委報告書刊行
41	西浦・吹手西遺跡	縄文・古墳～近世	方形周溝墓、古代住居	1991年市教委報告書刊行
42	大工前遺跡	古代・中世近世	B下水田、人造水路、畝状遺物、A下島	1982年市教委報告書刊行
43	広島寺前遺跡	古代・中世	古代住居、B下水田、城館	1983年市教委報告書刊行
44	柴崎遺跡群II	古墳～古代	B下水田	1986年市教委報告書刊行
45	大中村北A・大工前遺跡	古代～近世	B下水田、人造水路、A処理痕	1983年市教委報告書刊行
46	柴崎遺跡群II	古代	B下水田	1985年市教委報告書刊行
47	柴崎前・村北B遺跡	古代	B下水田	1982年市教委報告書刊行
48	下村北遺跡	古墳～中世	B下水田、城館	1983年市教委報告書刊行
49	砂内遺跡	古墳～中世	古墳	1983年市教委報告書刊行
50	柴崎村間遺跡	古墳・中世	溝、井戸、土坑	1989年遺跡調査会報告書刊行
51	柴崎遺跡群I	古代	B下水田	1984年市教委報告書刊行

第２表　周辺遺跡一覧表（２）

No.	遺跡名	主な時代	主な遺構	報告書・文献等
52	柴崎無線塔遺跡	古墳～近世	自然河川跡、古代住居、B下水田、中世屋敷、A土塁	1998年県企業団報告書刊行
53	下大和遺跡	古墳～古代	古墳住居、古代住居	1978年市教委調査
54	上岡遺跡	縄文・古墳～古代・近世	古墳住居、城館	1981年県企業団報告書刊行
55	上岡町榎町北遺跡	縄文・古墳～中世	古代住居、PA下水田、B下水田、A下水田	2002年県企業団報告書刊行
56	上岡町五反田遺跡	古墳・古代・近世	PA下水田、B下水田、A下水田	1999年県企業団報告書刊行
57	下滝大水遺跡	古墳～中世	近世屋敷、古墳住居、古代住居、中世屋敷	2004年県企業団報告書刊行
58	鎧貫小林前遺跡	古墳～近世	古墳住居、古代住居、古代寺院	2006年県企業団報告書刊行
59	矢中町東遺跡	古墳～古代	方形周溝墓、B下水田、水路　物部私部田土	1984年市教委報告書刊行
60	矢中町東B遺跡	古墳～古代	方形周溝墓群、前方後方形周溝墓、B下水田	1985年市教委報告書刊行
61	矢中町東C遺跡	古墳・中世	方形周溝墓群、B下水田、城館	1988年市教委報告書刊行
62	金賀野中里前遺跡	古墳～中世	古墳住居、古代住居、中世大溝上塁	1996年市教委報告書刊行
63	金賀野東坐平遺跡	古代	B下水田	県企報記載
64	東中里遺跡	古墳	FP下水田	1989年市教委報告書刊行
65	鍋貫遺跡	古墳～古代	古墳住居、周溝墓、古代外帰、古代住居、古代寺院	1985年市教委報告書刊行
66	金賀野万願寺II遺跡	縄文・古墳・中世	縄文住居、古墳住居、方形周溝墓、中世屋敷	1994年遺跡調査会報告書刊行
67	大堀城	天正年間	堀、土居、戸口、馬出、板小屋	新編「高崎市史」資料編3　1984・85年調査
68	大堀館	15世紀	堀、上居、戸口	新編「高崎市史」資料編3　県台帳記載
69	矢辺四城	中世(?)	城館	新編「高崎市史」資料編3
70	矢辺反町城館	中世(?)	城館	新編「高崎市史」資料編3
71	塚ノ越城館	14世紀	堀	1993年調査　「高崎情報阿地遺跡」内
72	鈴宮城館	中世(?)	堀・井戸	新編「高崎市史」資料編3　1977年調査
73	元島名城	15・16世紀	堀、上居、戸口、板小屋	新編「高崎市史」資料編3　1976・78年一部調査
74	元島名内出	16世紀	堀、上居、戸口	新編「高崎市史」資料編3　県台帳記載
75	新屋城館	中世(?)	城館	新編「高崎市史」資料編3
76	高尾城館	中世(?)	城館	新編「高崎市史」資料編3
77	下中居福田城館	中世(?)	城館	新編「高崎市史」資料編3
78	下中居夜叉城館	中世(?)	城館	新編「高崎市史」資料編3　県台帳記載
79	道場城館	中世(?)	堀	新編「高崎市史」資料編3　1985年調査
80	柴崎四郎城館	中世(?)	城館	新編「高崎市史」資料編3　1990年調査
81	高井城館	16世紀	二重堀、上居	新編「高崎市史」資料編3　県台帳記載
82	柴崎板井城館	文明9年(1474)	堀、上居	新編「高崎市史」資料編3
83	華人城館	天文年間	二重堀	新編「高崎市史」資料編3　県台帳記載
84	大胡宿城館	中世(?)	堀、上居、戸口	新編「高崎市史」資料編3　県台帳記載
85	智渡城館	中世(?)	城館	新編「高崎市史」資料編3
86	大下城館	16世紀	二重堀、上居、物見	新編「高崎市史」資料編3
87	降旗城館	16世紀	堀、上居	新編「高崎市史」資料編3　県台帳記載
88	都鳥寺	平安時代～	寺院、堀跡	新編「高崎市史」資料編3　県台帳記載
89	江原城館	16世紀末	堀、上居、郭	新編「高崎市史」資料編3
90	上滝中城館	南北朝期	堀	新編「高崎市史」資料編3　1980調査
91	下滝城	文明9年(1477)	堀、上居、戸口、井戸、別郭	新編「高崎市史」資料編3
92	下村北城館	16世紀	二重堀、戸口、井戸、別郭	新編「高崎市史」資料編3　1985年調査
93	前橋台	中世(?)	城館	新編「高崎市史」資料編3
94	東中城館	中世(?)	城館	新編「高崎市史」資料編3
95	元島名神輩陣古墳	前期	主体部粘上槨	1981年市教委報告書刊行
96	柴崎蟹沢古墳	前期	主体部粘上槨(?)	新編「高崎市史」資料編1「原始古代」資料編3
97	前山古墳	6世紀後半	複室構造の両袖型横穴式石室	新編「高崎市史」資料編1「原始古代」資料編3
98	御伊勢山古墳	—	前山古墳と同様横の前方後円墳	上毛古墳綜覧　増川村1号
99	綿貫観音山古墳	6世紀後半	両袖型横穴式石室	新編「高崎市史」資料編1　県教委報告書刊行
100	普賢寺裏古墳	5世紀前半?	竪穴系主体部?	新編「高崎市史」資料編1
101	不動山古墳	5世紀後半	凝灰岩製割抜式舟形石棺	新編「高崎市史」資料編1
102	剣塚二子山古墳	5世紀後半	舟形石棺2基	新編「高崎市史」資料編1
103	小鳥谷古墳	5世紀後半	凝灰岩製割抜式舟形石棺	新編「高崎市史」資料編1
104	八鳥谷古墳	前期末～中期初頭	竪穴系主体部?	新編「高崎市史」資料編1
105	大山古墳	前期末～中期初頭?	主体部粘上槨?	新編「高崎市史」資料編1

第Ⅳ章　基本層序

本遺跡では、近・現代の造成土が10～20cmの厚さで堆積し（Ⅰ層）、その下位にAs-Aが多く含まれた砂質シルト層（Ⅱ層）が確認された。このⅡ層は色調やAs-Aの含有量によってⅡ-1～Ⅱ-5層に細分される。主体となるのは井野川の洪水由来のものと思われる砂質シルトであるが、水成堆積特有の縞状堆積が認められないこと、場所によってAs-Aの混入量が異なることから、洪水堆積層ではなく人為的な盛土であろう。このⅡ層は調査区全域に20～50cmの厚さで堆積している。場所によってはこの層の下位にAs-A復旧溝が構築されていることからAs-A降下後に盛土されたものである。その下位のⅢ層はAs-Aを含まない砂質シルト層で、調査区全域で確認されたが調査区北部では厚さ数cm以下、南部では10cm前後と厚さが違う。この違いは、北部が削平を受けたためと考えられる。As-A復旧溝は本層を掘り込んで構築されることからAs-A降下以前の土層であり、削平もAs-A降下以前である。その下位には黒色粘質シルト層（Ⅳ層）が堆積している。厚さは調査区北部で10～20cm、南部では数～10cmと、上位のⅢ層とは逆に北部の方が厚い。なお、本層には指標となるテフラが含まれないが、遺構内に堆積した黒色粘質シルト層には、場所によっては灰白色軽石が少量含まれる。この軽石は色調や混入鉱物、発泡の具合から浅間山起源のものだと推定できるが、As-CかAs-Bかを同定することはできなかった。ただし、高崎市における他の遺跡での事例から推定するとAs-Cである可能性が高い。本層上面を当初の遺構確認面としたが、遺構覆土との相違を検出することが困難であった。Ⅴ層は黒褐色粘質シルト層で、Ⅳ層上面で検出できなかった遺構がその上面で検出できた。Ⅵ層以下は汚れたローム土であり、高崎泥流層と推定される。今回の調査では確認できなかったが、泥流層の厚さは数メートルに達するとされている。



第6図　基本十層柱状図

Ⅰ　10YR3/4　暗褐色シルト　As-A少量、礫2～10cmやや多く含む　近世～現代の盛土。

Ⅱ　軽石粒を含む砂質シルト　盛土とみられる。

　Ⅱ-1　10YR6/2　灰黄褐色砂質シルト　As-A部分的に多く含む　粘性・締まりともになし。

　Ⅱ-2　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質シルト　As-A少量含む　南西の一部でのみ存在　場所により炭化物φ1cm含む　粘性やや弱。

　Ⅱ-3　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　黄褐色シルトブロック少量、As-A少量含む　粘性やや弱。

　Ⅱ-4　10YR4/1　褐灰色砂質シルト　As-A少量含む　粘性やや弱。

　Ⅱ-5　10YR5/2　灰黄褐色軽石層　褐色砂質シルトを含む As-A二次堆積層　南西の一部でのみ存在　粘性・締まりともになし。

Ⅲ　2.5Y4/1　黄灰色砂質シルト　褐色シルトブロックφ1cm少量、小礫少量含む　洪水堆積層の二次堆積か。

Ⅳ　10YR2/1　黒色粘質シルト　灰褐色軽石粒少黒含む　粘性・締まりともにやや強い。

Ⅴ　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　Ⅳ層とⅥ層の漸移層　小礫少量含む　粘性・締まりともにやや強い。

Ⅵ　にぶい黄褐色粘質シルトと褐色シルトの混土　小礫少量含む　高崎泥流層か。

Ⅶ　10YR8/3　浅黄橙色粘質シルト　部分的に黄橙色に変色　礫φ2～10cm含む　高崎泥流層か。

Ⅷ　10YR6/8　明黄褐色粘質シルト　礫φ1～5cmやや多く含む　高崎泥流層か。

第Ⅴ章　検出された遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は、溝４条、土坑６基、ピット31基である。第Ⅱ章で述べたように、遺構の検出作業は当初Ⅳ層上面で行ったが、SD1以外は遺構の覆土がⅣ層とほとんど同質であったために遺構範囲を確定することができなかった。そのためⅣ層を段階的に掘削、精査して検出作業を行ったが、最終的にはⅤ層上面で検出作業を行わざるを得なかった。よって、大部分の遺構については、調査はⅤ層上面からであるが、遺構そのものはⅣ層上面もしくはⅣ層中から掘り込まれているものとみられる。

第１節　溝

SD1　（第８図　PL.2・4）

位　　置　調査区西端のE2グリッドから南東のA6グリッドにかけて検出された。検出面はⅣ層上面である。東端は攪乱に壊されて平面形は不明瞭になるものの、調査区南壁で断面を確認することができ、走行方向と規模を推定することができる。

形状・規模　ほぼ直線的な溝であり、検出総延長は約25.9ｍ、走行方向はN-52°-Wを示し、最大幅は約2.3ｍを測る。西端ではやや幅が狭くなり、東端でも幅が狭くなっている。断面形は浅い弧状で、深さは最深部で0.38ｍである。底面には日立った凹凸はなく、北西から南東にわずかに傾斜する。

覆　　土　底面直上を除き、Ⅲ層と同質の褐灰色砂質シルトで埋没している。人為的に埋められたものか否かは不明である。底面直上には場所によって下位のⅣ層、Ⅴ層が混ざった砂質シルトが堆積していた。As-B、As-A等の指標テフラはいずれにも含有されていなかった。

遺　　物　覆土から９世紀後半の須恵器坏・蓋・甕の破片が出土したが、その量は多くない。その他、古墳時代の土師器坏・甕の小破片が出土した。中世以後の遺物は出土しなかった。

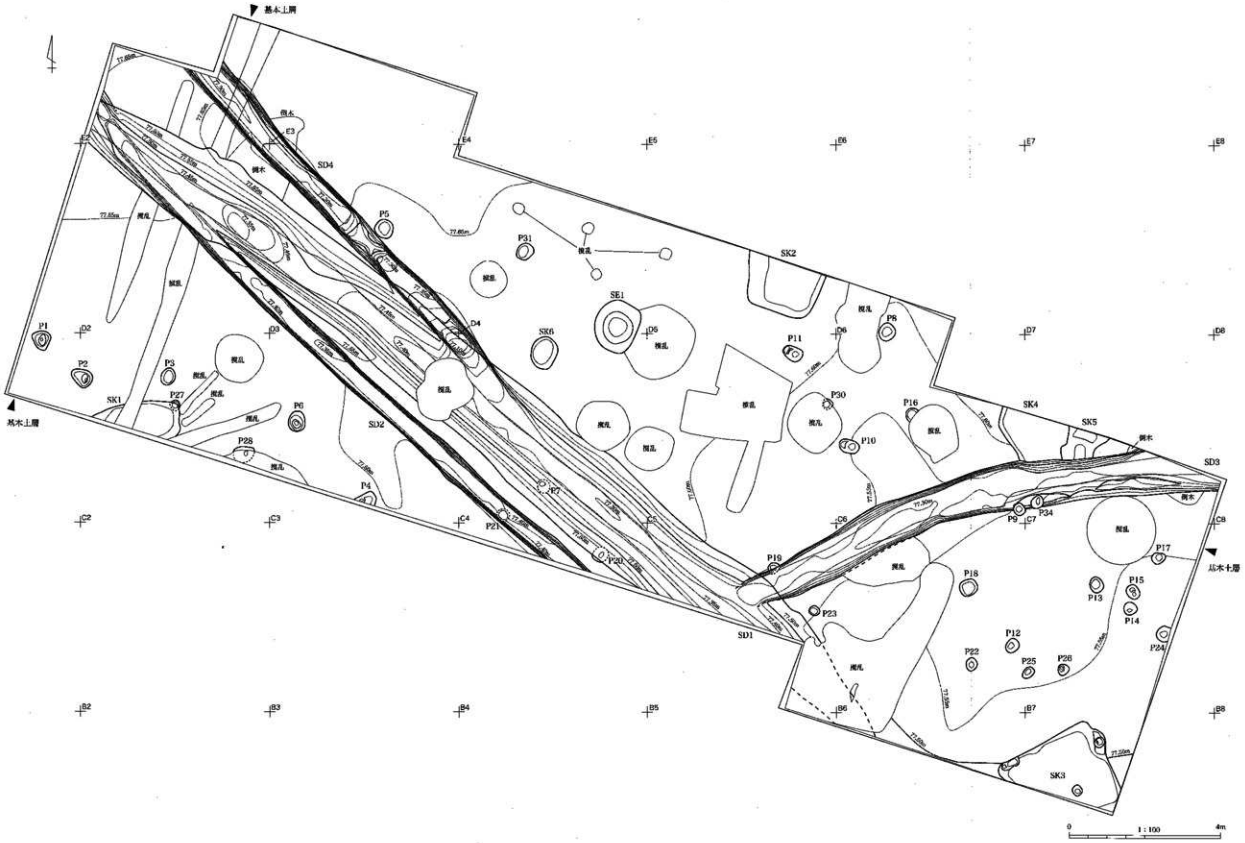
時　　期　覆土にAs-Bが含まれていないことからAs-B降下以前に埋没したとみられる。出土遺物の下限が９世紀後半であることから、その頃である可能性が高い。

SD2　（第９・10図　PL.2・4）

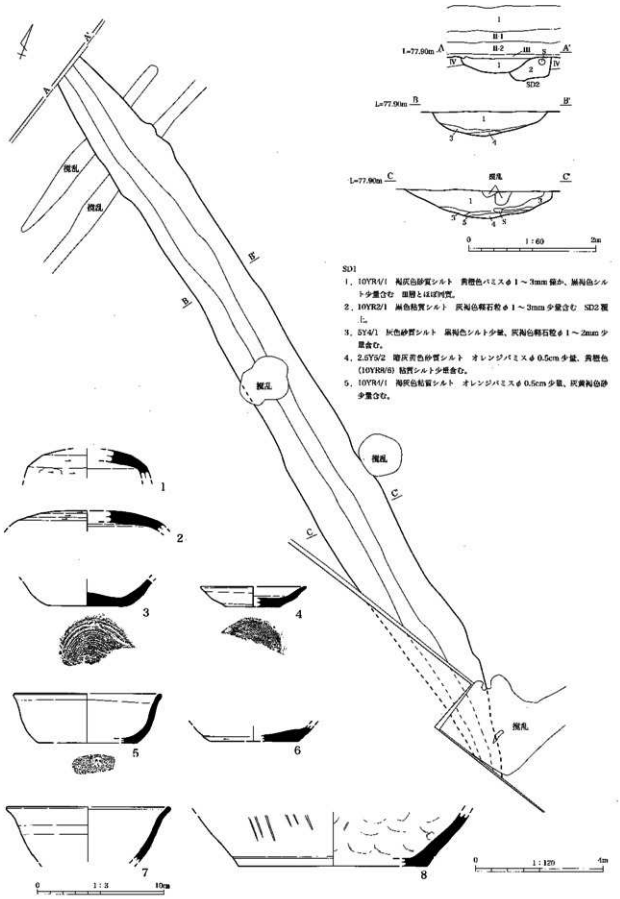
位　　置　調査区西端のE2グリッドから中央南のB4グリッドにかけて検出された。検出面はⅤ層上面であるが、調査区西壁での土層断面から、Ⅳ層上面から掘り込まれていることが判明している。SD1と重複し、それより古い。西端以外はSD4とほぼ平行し、深さもおおむね同等である。両者の間隔は2.6～2.8ｍである。

形状・規模　西端を除いてほぼ直線的な溝であり、検出総延長は約17.5ｍ、走行方向は西端以外ではN-47°-Wを示し、幅は0.55～0.65ｍとほぼ一定している。西端ではやや急に北へ曲がる。断面形は箱状で、深さは最深部で0.38ｍである。底面は小さな凹凸が多く、北西から南東へわずかに傾斜する。

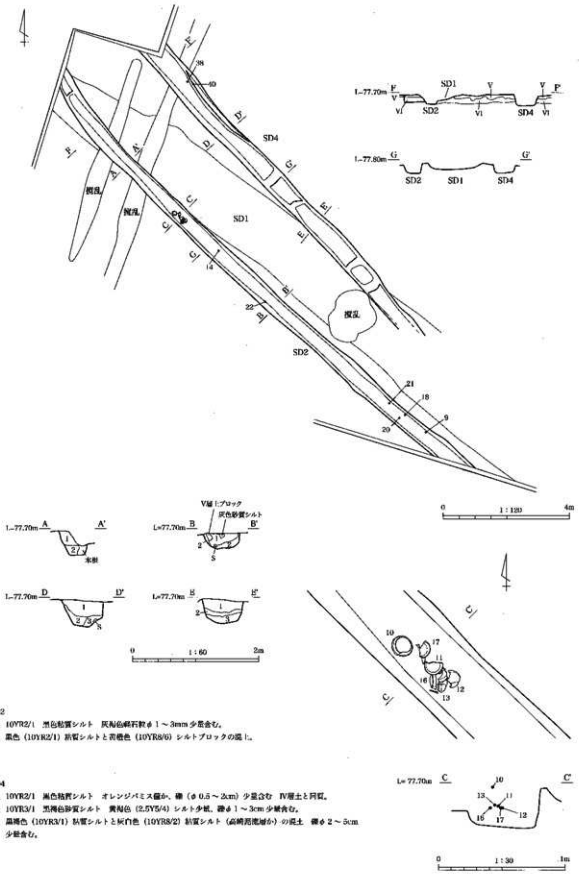
覆　　土　上半はⅣ層と同質の黒色粘質シルトであり、峻別は極めて困難である。ただし、本跡覆土には灰白色軽石粒がわずかに含まれるため断面では両者の境界を引くことができる。また、Ⅲ層に類似する砂質シルトやⅤ層上のブロックが少量混じる。下半はⅥ層土のブロックが混じった黒色粘質シルトが堆積していた。


基本上層
基本上層
基本十層
SD1
SD2
SD3
SD4
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SE1
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P30
P31
P34
C2
C3
C4
C5
C6
C7
C8
D2
D3
D4
D5
D6
D7
D8
E3
E4
E5
E6
E7
E8
B2
B3
B4
B5
B6
B7
B8
0
1:100
4m

第７図　遺跡全体図



第８図　SD1及び出土遺物



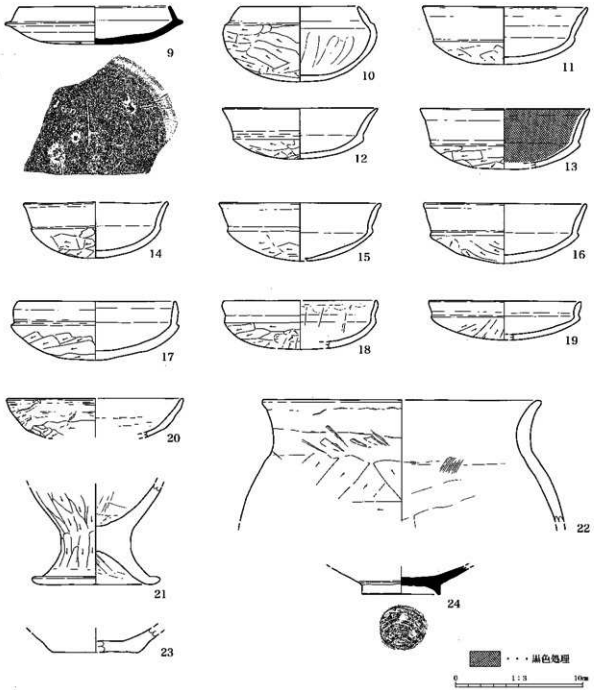
SD2

1．10YR2/1　黒色粘質シルト　灰褐色砂石粒φ1～3mm少量含む。
2．黒色（10YR2/1）粘質シルトと黄橙色（10YR8/6）シルトブロックの混じ。

SD4

1．10YR2/1　黒色粘質シルト　オレンジパミス微か、礫（φ0.5～2cm）少量含む　Ⅳ層土と同質。
2．10YR3/1　黒褐色砂質シルト　黄褐色（2.5Y5/4）シルト少量、礫φ1～3cm少量含む。
3．黒褐色（10YR3/1）粘質シルトと灰白色（10YR8/2）粘質シルト（高崎周辺産か）の混土　礫φ2～5cm少量含む。

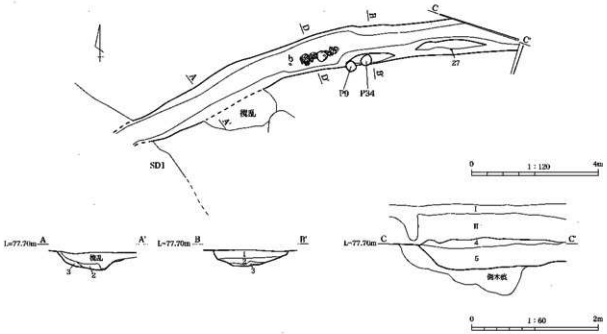
第9図　SD2・4



第10図　SD2出土遺物

遺　　物　西部（D2グリッド）から土師器坏が6点（10～13・16・17）まとまって出土した。溝底面より15cm以上上位からの出土であり、埋没途中で包含されたものと考えられる。その他、須恵器・土師器の破片が出土した。遺物のほとんどは古墳時代後期の6世紀末～7世紀初頭に比定されるが、覆土上面付近からは9世紀後半の須恵器坏（24）が出土している。

時　　期　SD1構築以前に完全に埋没していることと、上記の出土遺物の様相から、古墳時代後期6世紀後半～7世紀初頭の溝と考えられる。



SD3

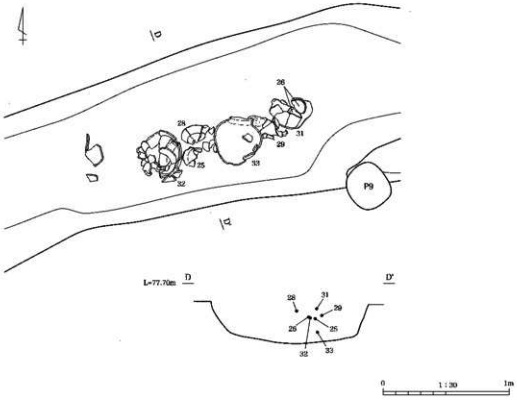
1．10YR2/1　黒色粘質シルト　黄橙色（10YR8/6）シルト少量。焼土粒若かに含む。

2．10YR3/1　黒色粘質シルト　黄橙色（10YR8/6）シルト少量含む。

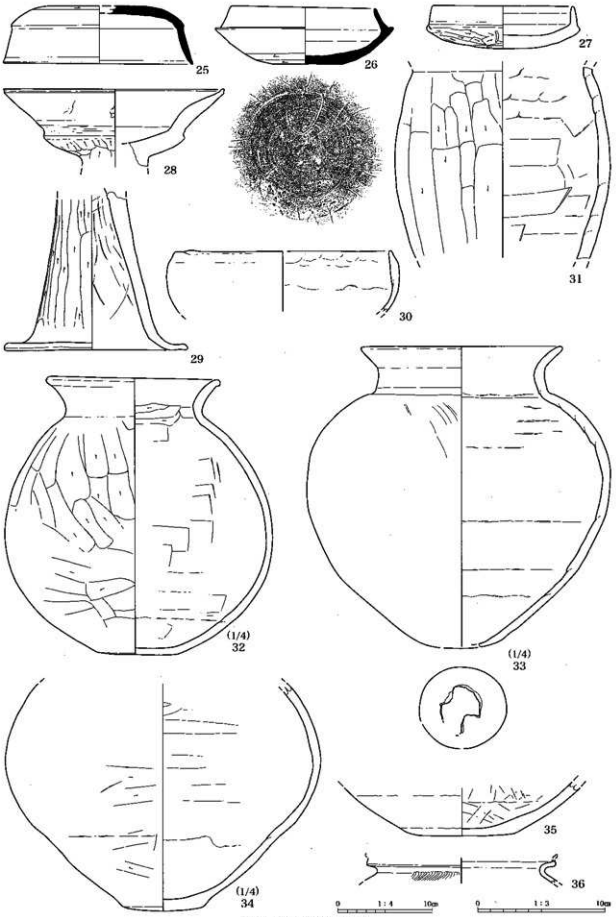
3．2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　明黄褐色（10YR7/6）シルトブロックやや多く含む。

4．10YR3/1　黒褐色砂質シルト　オレンジパミス少量含む。

5．10YR2/2　黒褐色シルト　オレンジパミス少量含む　粘性やや強い。



第11図　SD3



第12図 SD3出土遺物

SD3 （第11・12図　PL.2・3・5）

位　　置　調査区中央南部のB5グリッドから北東角のC7グリッドにかけて検出された。検出面はV層上面であるが、調査区北・東壁での上層断面から、Ⅳ層上面から掘り込まれていることが判明している。西端はSD1と重複し、それに壊されて消失している。また、SK4・5、及びP9・34と重複し、前2者より新しく、後2者より古い。

形状・規模　緩く弧を描く溝であり、検出総延長は約13.3 m、走行方向はN-60～82°-Eを示す。幅は北半でやや広がり、最大幅は約1.2 mを測る。断面形は浅い弧状で、深さは最深部で0.46 mである。底面には凹凸が多く、テラス状となる場所もある。ほぼV層上面での等高線に沿う。

覆　　土　Ⅵ層上の小ブロックを含む黒色粘質シルトを主体とする。底面直上ではブロックの含有量が多い。場所によって焼土粒やオレンジ色のパミスを含む。給源を同定できる軽石は含有されていない。

遺　　物　覆土から須恵器・土師器が出土した。中央付近では底面からやや浮いた状態で須恵器坏、土師器甕、高坏合わせて9個体がまとまって出土し、そのうち7点（25・26・28・29・31～33）を掲載した。このうち33の甕は底部を打ち欠いて穿孔している。また、離れて出土した土師器坏（27）の内面には、籾と思われる種子の圧痕が残る。長さ6.0mm、幅2.6mmの短粒米とみられる。坏、高坏、長胴甕の特徴から6世紀後半に比定できるが、丸胴甕はやや異質である。

時　　期　出土遺物の様相から6世紀後半頃の溝とみておきたい。

SD4 （第9・13図　PL.2・6）

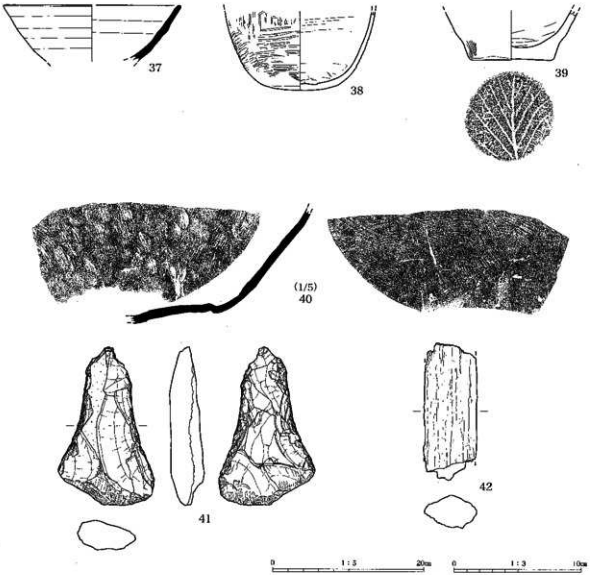
位　　置　調査区北西角のE2グリッドからC4グリッドにかけて検出された。検出面はV層上面であるが、調査区西壁の土層断面から、Ⅳ層上面から掘り込まれていることが判明している。東端はSD1と重複し、それに壊されて消失している。西端以外はSD2とほぼ平行する。

形状・規模　ほぼ直線的な溝であり、検出総延長は約12.5 m、走行方向はN-43°-Wを示す。幅は東半で0.65～0.70 m、西半でやや広がり、0.72～0.80 mを測る。断面形は箱状で、深さは最深部で0.43 mである。底面には凹凸が多く、テラス状に高くなる箇所や逆に一段低くなる箇所が認められた。北西から南東にわずかに傾斜する。

覆　　土　上半はⅣ層と同質の黒色粘質シルトであり、灰白色軽石粒がわずかに含まれる。下部は黒色粘質シルト混じりの攪拌されたV層土やⅥ層土であるが、倒木跡と重なる範囲では黒色土が主体である。

遺　　物　覆土から須恵器・土師器の破片と石器が出土した。西端近くでは楕円形の自然石数点とともに、須恵器甕（40）、及び叩き目がある土師器小型甕（38）の破片が出土した。この小型甕は器形・調整手法・胎土から搬入品とみられる。これらの遺物は覆土上面からの出土であり、本溝がほとんど埋没した時点で包含されたものである。また、出土範囲が径0.5 m程にまとまっていることから、溝の上位から構築された未検出の土坑に伴う可能性も考えられる。これらを含めた遺物の年代は、9世紀中～後半頃と思われる。なお、石器のうち打製石斧（41）は、黒色頁岩製で、縄文時代のものである可能性が高い。

時　　期　上記のように、本溝の存続期間と遺物の時期は一致しない可能性が高い。SD1構築以前に完全に埋没していることや、形状や走行方向がSD2と近似することから、SD2とほぼ同時期の6世紀末～7世紀初頭と考えたい。



第13図　SD4出土遺物

第2節　井戸

SE1　(第14図　PL.3)

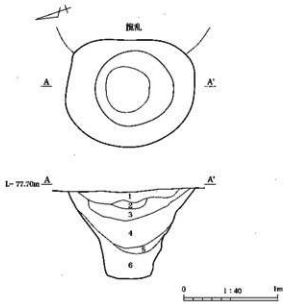
位　　置　調査区ほぼ中央のC4、D4グリッドで検出された。検出面はⅤ層上面だが、本来はⅣ層を掘り込んで構築されていたと推定される。東側上端は近代以降の攪乱に壊されている。

形状・規模　上端の一部が壊されているため不明瞭であるが、平面形は不整円形を呈し、上端での長径1.33 mを測る。断面形は漏斗状で、上端から中程まで斜めに、中程から底面までは垂直に近い角度で掘り込まれる。底面はほぼ平坦で、深さは0.95 mである。

覆　　土　上半は黒褐色粘質シルトであり、オレンジ色のパミス粒がわずかに含まれる。下半は黒色粘質シルト主体で、Ⅵ～Ⅷ層土を混入する。指標となるテフラは確認できなかった。

遺　　物　出土しなかった。

時　　期　覆土にAs-Bが含まれないことから、それ以前に埋没したことが考えられる。覆土の質がSD2～4と共通するため、それらと同時期の古墳時代後期頃か。



SE1
1. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト オレンジパミス少量含む。
2. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト オレンジパミス少量、灰黄褐色（10YR6/8）シルト少量含む。
3. 10YR2/1 黒色粘質シルト 褐色（10YR4/6）シルト微か、オレンジパミス少量含む。
4. 10YR2/1 黒色粘質シルト 褐色（10YR4/6）シルト少量含む。
5. 10YR2/1 黒色砂質シルト オレンジパミス微かに含む。
6. 2.5Y2/1 黒色粘質シルト 明黄褐色（10YR6/8）シルトブロック＠1～5cm少量含む しまり中々弱い。

第14図 SE1

第3節 土坑

SK1 （第15図 PL.3・6）

位　　置　調査区西端近くの南壁際、C2グリッドで検出された。遺構の南半は調査区外である。検出面はV層上面だが、遺物の出土レベルと調査区壁の土層断面からIV層上面から構築されていることが判明している。溝状の攪乱によって一部壊されている。

形状・規模　全体の形状は不明である。検出された部分から推定すると、平面形は不整長方形または不整楕円形を呈するものと思われる。検出された規模は、上端で東西約 2.2 m、南北約 1.0 mを測る。断面形は全体的には浅い逆台形であるが、底面は凹凸が激しい。深さは最深部で 0.35 mである。

覆　　土　主体は黒褐色砂質シルトであり、V～VI層土のブロックがわずかに含まれる。土層断面図では覆土上位のIII層との境界が乱れているようにみえるが、攪拌されてはいない。なお、覆土には指標となるテフラは確認できなかった。

遺　　物　覆土から土師器の坏（43）破片が、また、底面直上から甕（44）破片が出土した。遺物の年代は古墳時代後期6世紀後半である。

時　　期　覆土に As-B が含まれないことから、それ以前に埋没したことが考えられる。遺物の年代である6世紀後半であろうか。

SK2 （第15図 PL.3・6）

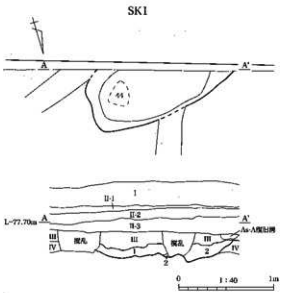
位　　置　調査区中央の北壁際、D5グリッドで検出された。遺構の北半は調査区外である。検出面はV層上面だが、遺物の出土レベルと調査区壁の土層断面から、IV層上面から掘り込まれていることが判明している。

形状・規模　全体の形状は不明である。検出された部分から推定すると、平面形は長方形または不整方形を呈するものと思われる。検出された規模は、上端で東西約 2.1 m、南北約 1.3 mを測る。断面形は全体的には浅い逆台形であるが、底面は大きな凹凸が多い。深さは最深部で 0.40 mである。

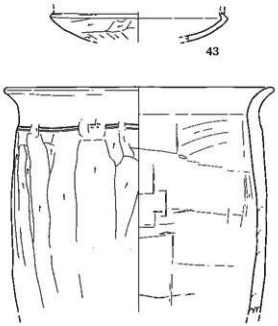
覆　　土　主体はIV層とほぼ同質の黒色粘質シルトであり、上部には浅間山起源と思われる灰白色軽石が含まれる。As-C の可能性が高いものの、断定はできない。人為的な埋土の可能性がある。

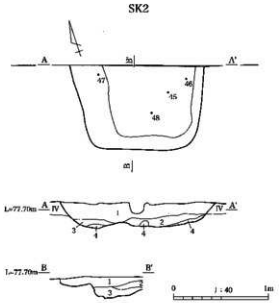
遺　　物　底面からやや浮いた状態で完形に近い土師器坏（45）が出土した。その他、土師器坏・甕の破片が少量出土している。遺物の年代は、坏と甕で若干差があるようにも思えるが古墳時代後期の6世紀後半であろう。

時　　期　遺物の年代である6世紀後半とみておきたい。

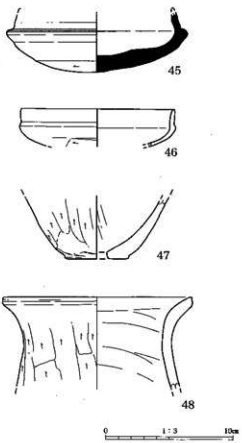


SK1
1．10YR3/1　黒褐色砂質シルト　灰色シルト少量、黄橙色シルトブロック微か、礫微かに含む。
2．黒色（10YR2/1）粘質シルトと褐灰色（10YR4/1）砂質シルトの混土　オレンジパミス少量含む。





SK2
1．10YR2/1　黒色粘質シルト　灰白色細石φ0.5cm少量、オレンジパミス少量含む。
2．10YR2/1　黒色粘質シルト　オレンジパミス微かに含む。
3．10YR2/1　黒色粘質シルト　明黄褐色（10YR6/8）シルトブロック少量含む。
4．10YR6/6　明黄褐色粘質シルト　黄橙色粘質シルトに黒褐色シルトが混じったもの　礫φ1～2cm少量含む。



第15図　SK1・2及び出土遺物

SK3 （第16図 PL.3・6）

位　　置　調査区南東角、A6、A7グリッドにまたがって検出された。遺構の南端は調査区外である。検出面はⅤ層上面だが、Ⅳ層上面から構築されている可能性がある。

形状・規模　全体の形状は不明である。検出された部分から推定すると、平面形は長方形または不整方形を呈するものと思われる。検出された規模は、上端で北東―南西約2.7 m、北西―南東約2.5 mを測り、中央南部、及び東・北壁際に径30cm内外、深さ20cm程のピットを伴う。断面形は全体的には浅い箱状で、底面には凹凸が多い。深さは最深部で検出面から0.19 mである。

覆　　土　主体となるのはⅣ層とほぼ同質の黒色粘質シルトであり、下半にはⅥ層土と思われる黄褐色シルトが多く混じる。他の遺構に比べて粘度が高く締まりがやや弱いが、これは含水比の違いによるものであろう。なお、覆土には指標となるテフラは確認できない。

遺　　物　覆土中から須恵器・土師器の破片が少量出土している。遺物の年代は9世紀後半頃である。

時　　期　覆土にAs-Bが含まれていないことから、それ以前に埋没している可能性が高い。遺物の年代である9世紀後半頃であろうか。SD1と同時期の可能性もある。

SK4 （第16図 PL.3）

位　　置　調査区北西の北壁際、C6グリッドとC7グリッドにまたがって検出された。遺構の北半は調査区外であり、南端はSD3に、東端はSK5に重複し、それぞれ壊されている。検出面はⅤ層上面だが、調査区壁の土層断面からⅣ層上面から構築されていることが判明している。

形状・規模　全体の一部しか調査できなかったため形状は不明である。検出された規模は、上端で東西約1.8 m、南北約1.2 mを測る。断面形は全体的には浅い逆台形状と推定され、底面には小さな凹凸が多い。深さは最深部で0.37 mである。

覆　　土　主体となるのはⅣ層とほぼ同質の黒色粘質シルトであり、上部には浅間山起源と思われる灰白色軽石が含まれる。自然堆積と思われる。

遺　　物　出土しなかった。

時　　期　重複関係から、古墳時代後期以前と推定される。

SK5 （第16図 PL.3）

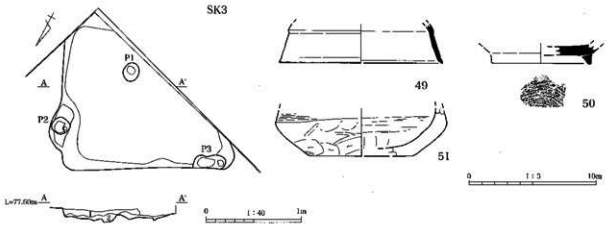
位　　置　調査区北西の北壁際、C7グリッドで検出された。遺構の北半は調査区外であり、SD3、SK4と重複している。前者より古く、後者より新しい。SK4調査途中で検出されたが、調査区壁の土層断面からⅣ層上面から構築されていることが判明している。

形状・規模　全体の一部しか調査できなかったため形状は不明である。検出された範囲では楕円形に近い不定形を呈し、規模は上端で東西約1.3 m、南北約1.0 mを測る。断面形は東西方向ではV字状に近く、南北方向では不定である。底面はテラスを持ち、小さな凹凸も多い。深さは最深部で0.65 mである。

覆　　土　主体となるのはⅣ層とほぼ同質の黒色粘質シルトであり、上部に細かい炭化物が含まれる。自然堆積か人為的に埋めたものか不明である。

遺　　物　出土しなかった。

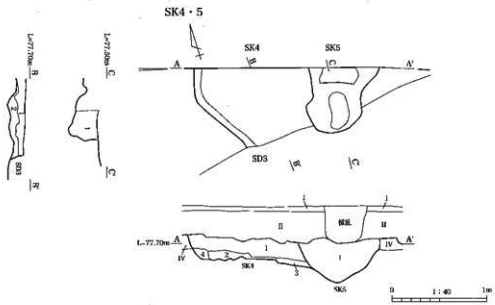
時　　期　重複関係から、古墳時代後期初頭以前と推定される。



SK3

1．10YR3/1　黒褐色粘質シルト　明黄褐色（10YR6/8）シルトブロック少量、炭化物φ0.5～2cm微か、焼土ブロック微かに含む。

2．黄灰色（2.5Y4/1）シルトと灰黄色（10YR7/2）シルトの混土



SK4

1．10YR2/1　黒色粘質シルト　灰白色粗しφ0.5cm少量、オレンジパミス少量、焼土粒微かに含む。

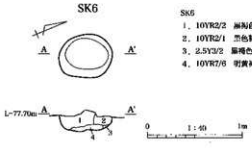
2．褐色（10YR2/1）粘質シルトと明黄褐色（10YR6/6）シルトブロックの混土　オレンジパミス微か、小礫φ0.5cm微かに含む。

3．2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　黄橙色ローム・オレンジパミスともに微かに含む。

4．2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　黄橙色ローム微かに含む。

SK5

1．10YR2/1　黒色粘質シルト　オレンジパミス少量、炭化物φ0.5cm微かに含む。



SK6

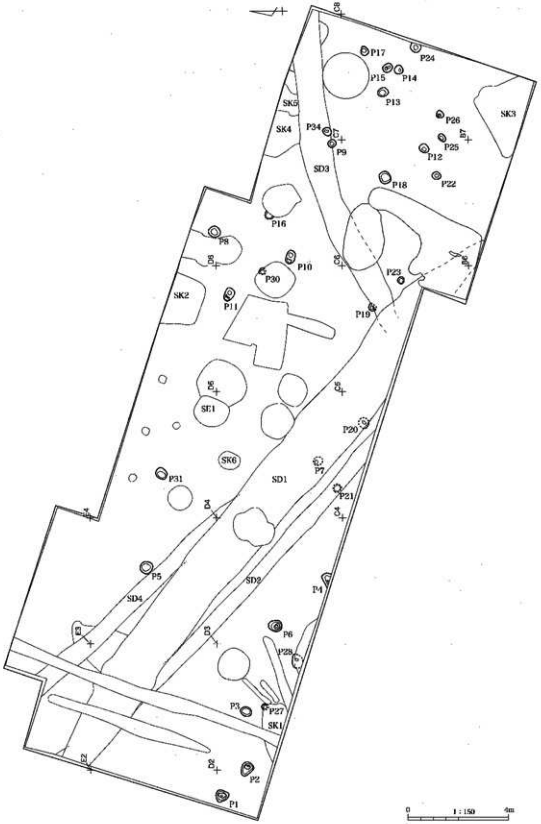
1．10YR2/2　黒褐色砂質シルト　オレンジパミス少量、小礫φ0.5cm少量含む。

2．10YR2/1　黒色粘質シルト　オレンジパミス微か、焼土粒、炭化物φ0.5cm微かに含む。

3．2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　黒色（10YR2/1）シルトと明黄褐色（10YR6/8）シルトの混土。

4．10YR7/6　明黄褐色粘質シルト　黒褐色（10YR2/2）シルト少量、小礫φ0.5cm微かに含む。

第16図　SK3～6及び出土遺物


P17
P24
P15
P14
P13
SK5
SK4
P34
P9
SD3
P26
P25
P12
SK3
P18
P22
P16
P8
P10
P30
P23
SK2
P11
P19
SE1
P20
SK6
P31
SD1
P7
P21
P5
SD4
SD2
P4
P6
P28
P3
P27
SK1
P2
P1
0
1:150
4m

第17図　ピット全体図

SK6 （第16図 PL.3）

位　　置　調査区中央やや西、C4グリッドのV層上面で検出された。本跡直上のⅣ層上面付近から須恵器破片や自然礫が数点集中して出土しており、本跡に伴う遺物であることが考えられる。このことから、Ⅳ層上面から構築されている可能性がある。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、規模は上端で東西0.69 m、南北0.86 mを測る。断面形はU字形に近い。検出面からの深さは最深部で0.24 mである。

覆　　土　主体となるのは黒褐色砂質シルトであり、部分的に黒色粘質シルトが堆積している。底面直上にはⅥ～Ⅶ層以下のローム土がやや多く混じっている。堆積状態から人為的埋土の可能性が高い。

遺　　物　出土しなかったが、本跡直上のⅣ層上面付近から須恵器坏・甕の破片、および20cm大の自然礫が少量出土した。須恵器の年代は9世紀後半である。

時　　期　覆土にAs-Bが含まれていないことから、それ以前に埋没している可能性が高い。覆土の質がSD1に近いため、近い時期であろうか。遺物が本跡に伴うとすれば、9世紀後半頃の可能性がある。

第4節　ピット

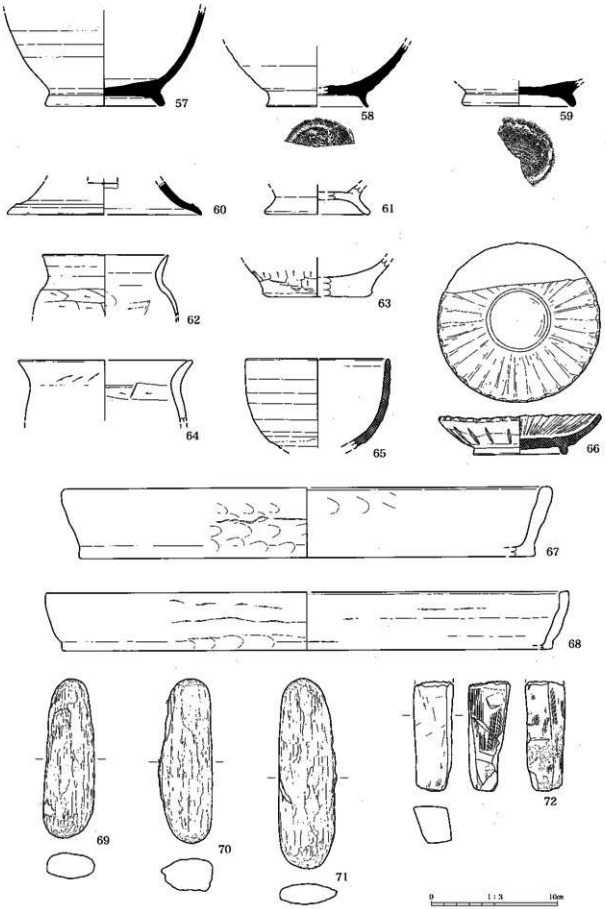
本遺跡からは、主にV層上面でピットが31基検出された（第17図）。この中には柱痕が検出され、柱穴と見なし得るものもある（P9～11・28）が、これらの柱穴の配置からは建物を復元することはできなかった。資料整理の結果欠番となったものも含め、章末に一覧表を掲げる。

第18図　ピット出土遺物

第5節　遺構外出土遺物

本遺跡ではⅣ層中から遺物が疎らに出土しており、その量はコンテナに1箱程度である。遺構覆土出土の可能性がある遺物も含まれているが、遺構範囲確定以前に出土したものは遺構外出土遺物として扱っている。また、攪乱内から出土した近世の陶磁器や古墳時代～古代の遺物も本節で掲載した。陶磁器は小破片の状態で少数ずつ出土することが多かったが、調査区東部の同一攪乱内からは現代の廃棄物に混じってやや大きめの破片を含む数十点が出土した。このうち4点（65～68）を掲載したが、これらの生産年代は17世紀後半～18世紀前半にまとまっており、本来は当該期の何らかの遺構が存在したものと推測される。

第19図　遺構外出土遺物（Ⅰ）



第20図　遺構外出土遺物(2)

第3表　ピット観察表

No	グリッド	検出面	平面形状	断面形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複・備考
1	C1	V層上面	不整円形	擂鉢状	0.49	0.45	0.73	柱穴
2	C1・2	V層上面	不整楕円形	擂鉢状	0.55	0.45	0.60	柱穴
3	C2	V層上面	楕円形	逆台形状	0.45	0.36	0.16	
4	C3	V層上面	不整楕円形？	階段状	(0.48)	0.38	0.36	柱穴
5	D3	V層上面	円形	逆台形状	0.47	0.46	0.33	
6	C3	V層上面	楕円形	階段状	0.53	0.40	0.62	柱穴
7	C4	SD1底面	楕円形	U字形	(0.37)	(0.32)	0.47	
8	C6・D6	V層上面	不整円形	U字形	0.44	0.41	0.34	
9	C6	V層上面	円形	U字形	0.30	0.29	0.46	SD3より新　柱穴
10	C6	V層上面	楕円形	階段状	0.53	0.35	0.53	柱穴
11	C5	V層上面	楕円形	階段状	0.50	0.35	0.55	柱穴
12	B6	V層上面	不整円形	U字形	0.35	0.34	0.45	
13	B7	VI層上面	楕円形	逆台形状	0.42	0.33	0.38	
14	B7	VI層上面	不整円形	U字形	0.33	0.32	0.35	
15	B7	VI層上面	楕円形	階段状	0.39	0.32	0.47	
16	C6	V層上面	不整円形？	平円状	0.38	(0.19)	0.20	現代の瓦片より古
17	B7	VI層上面	不整楕円形	U字形	0.35	0.28	0.45	
18	B6	V層上面	不整円形	平円状	0.50	0.47	0.24	
19	B5	VI層上面	不整円形	平円状	(0.27)	0.24	0.19	SD3より古
20	B4	V層上面	不整円形	平円状	(0.40)	(0.36)	0.34	SD1より古
21	C4	SD2底面	不整円形	U字形	(0.33)	(0.31)	0.43	SD2より古
22	B6	V層上面	楕円形	U字形	0.36	0.26	0.41	
23	B5	V層上面	不整円形	平円状	0.27	0.25	0.20	
24	B7	VI層上面	不整円形？	U字形	0.40	(0.32)	0.43	
25	B6・7	VI層上面	不整楕円形	U字形	0.35	0.23	0.26	
26	B7	VI層上面	不整円形	U字形	0.28	0.28	0.76	柱穴
27	C2	V層上面	不整円形	平円状	(0.27)	0.24	0.25	SK1より古
28	C2	V層上面	楕円形？	U字形	(0.56)	0.42	0.70	撹乱より古
29				欠				
30	C5	V層上面	不整円形	逆台形状？	(0.27)	0.24	0.32	撹乱より古
31	D4	IV層上面	不整楕円形	逆台形状	0.47	0.39	0.36	
32				欠				
33				欠				
34	C7	V層上面	不整楕円形	逆台形状	0.35	0.30	0.25	SD3より新

第4表　出土遺物観察表(1)

No	個別番号	出土位置	計測値 (cm・g) 残存 色調(外面・内面)／焼成	施土	特徴・調整・文様等
1	須恵器蓋	SD1	口：－　高：(2.2)　底：－　最大径：－ 天井部破片 外：灰色　内：灰白色／やや不良	石英、チャート、褐色粒、白色粒	ロクロ整形。 外：天井部右回転ヘラ削り。口縁部　部手持ちヘラ削りか？
2	須恵器蓋	SD1	口：－　高：(1.3)　底：－　最大径：－ 天井部破片 灰色／やや良	石英、褐色粒	ロクロ整形。 外：天井部右回転ヘラ削り。
3	須恵器坏	SD1	口：－　高：(1.0)　底：6.0　最大径：－ 底部1/2～体部 灰白色／やや不良	石英	ロクロ整形(右回転)。 外：底部回転糸切り。未調整。
4	須恵器皿	SD1	口：(8.3)　高：1.6　底：(4.4)　最大径：－ 口縁～底部1/4 明褐灰色／やや良	チャート、角閃石、白色粒	ロクロ整形(左回転)。 外：底部回転糸切り。未調整。
5	須恵器坏	SD1	口：(11.5)　高：3.9　底：(8.0)　最大径：－ 口縁～底部破片 灰色／良好	石英、角石、白色粒	ロクロ整形。 外：底部回転糸切り。未調整。 器形歪み大きい。
6	須恵器坏	SD1	口：－　高：(1.2)　底：(7.0)　最大径：－ 低～底部破片 灰色／良好	石英、チャート	ロクロ整形。 外：底部回転ヘラ切り後周縁を右回転ヘラ削り。
7	須恵器坏	SD1	口：(12.8)　高：(4.4)　底：－　最大径：－ 口縁～体部破片 灰白色／良好	石英	ロクロ整形(右回転)。
8	須恵器壺	SD1	口：－　高：(4.0)　底：(15.0)　最大径：－ 肩～底部破片 褐灰色／良好	石英、角石、結晶片岩、小礫	ロクロ整形。 外：体部ヘラ描き条線。陶工痕あり。底部直上段位沈線。ヘラ調整。 内：あて具痕。

第5表　出土遺物観察表(2)

No.	器種器種	出土位置	計測値(cm・g) 残存 色調(外側・内側)/焼成	胎土	特徴・調整・文様等
9	須恵器坏	SD2	口:12.0　高:3.0　底:－　最大径:14.0 口縁～底部1/3 灰色/良好	チャート、小礫	ロクロ整形。 外:底部左回転ヘラ削り。 底部ヘラ記号。
10	土師器坏	SD2	口:9.3　高:6.0　底:－　最大径:12.2 ほぼ完形 浅黄橙色/良好	石英、チャート、角色粒	外:口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラ削り。　内:口縁部ヨコナデ。体～底部ナデ。
11	土師器坏	SD2	口:12.9　高:4.6　底:－　最大径:－ 口縁～底部1/2 外:橙色　内:黒褐色/やや良	石英、チャート、褐色粒	外:口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラ削り。　内:口縁部ヨコナデ。体～底部ナデ。 内面黒色処理。
12	土師器坏	SD2	口:12.2　高:4.0　底:－　最大径:－ ほぼ完形 橙色/良好	チャート、角閃石、褐色粒	外:口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラ削り。　内:口縁部ヨコナデ。体～底部ナデ。
13	土師器坏	SD2	口:(13.3)　高:(4.8)　底:－　最大径:－ 口縁～底部1/4 外:橙色　内:黒色/良好	石英、チャート、褐色粒	外:口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラ削り。　内:口縁部ヨコナデ。体～底部ナデ。 内面黒色処理。
14	土師器坏	SD2	口:(11.3)　高:4.4　底:－　最大径:－ 口縁～底部1/4 橙色/やや不良	砂粒、褐色粒	外:口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラ削り。　内:口縁部ヨコナデ。体～底部ナデ。
15	土師器坏	SD2	口:(12.6)　高:(4.6)　底:－　最大径:－ 口縁～底部1/2 橙色/良好	砂粒、石英、褐色粒	外:口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラ削り。胎土悪い。　内:胎土悪い。ナデ不明瞭。
16	土師器坏	SD2	口:12.7　高:4.7　底:－　最大径:－ ほぼ完形 橙色/良好	チャート、角閃石、長石	外:口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラ削り。　内:口縁部ヨコナデ。体～底部ナデ。
17	土師器坏	SD2	口:12.8　高:4.7　底:－　最大径:13.3 口縁部～底部大損 にぶい橙色/良好	石英、チャート、白色粒	外:口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラ削り。　内:口縁部ヨコナデ。体～底部ナデ。
18	土師器坏	SD2	口:(12.0)　高:(3.9)　底:－　最大径:－ 口縁～底部1/4 にぶい橙色/やや良	石英、褐色粒	外:口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラ削り。　内:口縁～体部ヨコナデ。底部ナデ。
19	土師器坏	SD2	口:12.0　高:3.1　底:－　最大径:－ 口縁～底部2/2 にぶい赤褐色/良好	石英、角閃石、黒母、褐色粒、白色粒	外:口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラナデ。　内:口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラナデ。
20	土師器坏	SD2	口:(13.8)　高:(3.1)　底:－　最大径:－ 口縁～体部1/4 橙色/やや良	石英、角閃石	外:口縁部ヨコナデ。体部ヘラ削り。　内:口縁～体部ヘラナデ。
21	土師器台付壺	SD2	口:－　高:(7.7)　底:9.0　最大径:－ 脚～脚部 外:にぶい黄橙色　内:灰黄褐色/良好	石英、チャート、角閃石、雲母、白色粒	外:脚～脚部ヘラナデ。脚部脚ヨコナデ。　内:脚部ヘラナデ。脚部ナデ。脚部脚ヨコナデ。
22	土師器甕	SD2	口:(22.0)　高:(9.7)　底:－　最大径:－ 口縁～脚部1/4 にぶい橙色/良好	雲母、褐色粒、白色粒	外:口縁部ヨコナデ。体部ヘラ削り後刷毛。脚部ヘラ削り。　内:口縁部ヨコナデ。脚部ナデ。煤かなハケ目。
23	土師器甕	SD2	口:－　高:(1.5)　底:(6.8)　最大径:－ 脚～脚部破片 外:にぶい橙色　内:橙色/やや不良	砂粒、石英、角閃石、チャート、褐色粒	内外面剥離著しく不明瞭。
24	須恵器高台付坏	SD2上層	口:－　高:(2.0)　底:6.1　最大径:－ 体～底部1/3 にぶい黄橙色/良好	石英、チャート、角閃石、雲母、褐色粒	ロクロ整形。 外:底部糸切り後高台貼付。
25	須恵器壺	SD3	口:(14.8)　高:4.6　底:－　最大径:－ 天井～口縁部1/4 褐灰色/やや不良	石英、チャート、角閃石	ロクロ整形。 外:天井部右回転ヘラ削り。 二次的被熱、表面発泡。
26	須恵器坏	SD3	口:11.2　高:4.6　底:5.5　最大径:14.0 ほぼ完形 灰白色/良好	チャート、白色粒	ロクロ整形(右回転)。 外:底部右回転ヘラ削り。 底部(?)部ヘラ記号。自然釉。
27	土師器坏	SD3	口:11.0　高:3.4　底:－　最大径:12.1 口縁～底部2/3 にぶい橙色/やや不良	砂粒、石英、角閃石、褐色粒、白色粒	外:口縁部ヨコナデ。底部ヘラ削り。　内:口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面朝圧痕。最6.5mm×横3mm。
28	土師器高坏	SD3	口:17.4　高:(6.1)　底:－　最大径:－ 杯部小片 にぶい橙色/良好	砂粒、石英、雲母、褐色粒	外:口縁部ヨコナデ。体部ヘラ削り。　内:ヘラナデ。
29	土師器高坏	SD3	口:－　高:(12.0)　底:(14.3)　最大径:－ 脚端部1/2～脚部 橙色/やや良	砂粒、角閃石、褐色粒	外:脚部ヘラ削り。脚部ヨコナデ。　内:ヘラナデ。
30	土師器鉢か	SD3	口:(17.0)　高:(4.8)　底:－　最大径:(18.5) 口縁～体部破片 黒褐色/やや良	石英、角閃石、白色粒	外:口縁部ヨコナデ。体部開り後ナデ?　内:口縁部横位刷毛(斜ナサエ)。
31	土師器壺	SD3	口:－　高:(15.0)　底:－　最大径:(17.0) 胴部1/4 白灰色/やや良	砂粒、石英、角閃石、白色粒	外:胴部ヘラ削り。　内:胴部ヘラナデ。 器の可塑性あり。
32	土師器甕	SD3	口:17.9　高:29.3　底:8.8　最大径:28.3 口縁～底部4/5 灰黄色/良好	砂粒、石英、チャート、輝石、白色粒	外:口縁部ヨコナデ。胴～底部ヘラ削り。胴裾。　内:口縁部ヨコナデ。胴部ヘラ削り。胴～底部ヘラナデ。
33	土師器甕	SD3	口:－　底:31.8　厚:0.2　最大径:(32.0) 口縁～底部1/2 にぶい橙色/良好	石英、角閃石、長石、褐色粒	外:口縁部ヨコナデ。胴部ヘラ削り。底部特に剥離著しい。　内:口縁部ヨコナデ。胴部ナデ?剥離著しい。 底部穿孔。

第6表　出土遺物観察表(3)

No.	種別器種	出土位置	計測値（cm・g）残存 色調外面・内面／焼成	胎土	特徴・調整・文様等
34	土師器甕	SD3 (試掘)	口：－　高：(24.1)　底：8.6　最大径：(33.2) 胴～底裾1/4 にぶい褐色／良好	石英、チャート、雲母片岩	外：胴部ヘラ削り。底面ヘラ削り。　内：胴部ヘラナデ。
35	土師器甕	SD3	口：－　高：(3.8)　底：6.6　最大径：－ 胴～底部 外：褐色　内：にぶい褐色／良好	石英、雲母片岩、褐色粒、白色粒	外：胴部ナデ。　内：胴～底部ヘラナデ。
36	土師器S字甕	SD3 (試掘)	口：－　高：(1.7)　底：－　最大径：－ 底部破片 にぶい橙色／良好	砂粒、石英、角閃石	外：口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。　内：口縁部ヨコナデ。
37	須恵器坏	SD4	口：(14.0)　高：(4.5)　底：　最大径：－ 口縁～体部1/5 黒褐色／不良	石英、白色粒	ロクロ整形。
38	土師器小型甕	SD4	口：　高：(6.3)　底：4.2　最大径：－ 胴～底裾1/3 褐灰色／良好	石英、チャート	外：胴部叩き目。　内：胴～底部ヘラナデ。
39	土師器甕	SD4 (試掘)	口：－　高：(3.8)　底：6.3　最大径：－ 胴～底部 外：黒褐色　内：にぶい褐色／良好	砂粒、石英、角閃石、白色粒	外：胴部ナデ。下端ハケ目後ナデ？　内：胴部ヘラナデ。 底部木葉痕。
40	須恵器甕	SD4	口：－　高：(14.3)　底：－　最大径：－ 胴部破片 灰色／良好	石英、チャート、白色粒	外：平行叩き目。　内：あて具痕。
41	打製石斧	SD4	長：12.6　幅：7.6　厚：2.6　重：188.5 完形 黒褐色		黒色頁岩。 縄文時代か。
42	偏平棒状石器	SD4	長：10.9　幅：4.2　厚：2.6　重：168.0 破片 灰オリーブ色		緑色結晶片岩。 古墳時代か。
43	土師器坏	SK1	口：－　高：(3.5)　底：－　最大径：(14.0) 体部破片 にぶい橙色／良好	砂粒、石英、褐色粒	外：体部ヘラ削り。　内：体部ナデ。
44	土師器甕	SK1	口：21.0　高：(17.0)　底：　最大径：－ 口縁～胴部 にぶい橙色／良好	石英、チャート、角閃石、褐色粒	外：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラ削り。　内：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 煤の可能性あり。
45	須恵器坏	SK2	口：(12.6)　高：(4.8)　底：－　最大径：14.3 口縁完形 灰色／不良（酸化）	石英、チャート、褐色粒、白色粒	ロクロ整形。 外：調整部欠損。底部回転ヘラ削り後粗いナデ。　内：ナデ。
46	土師器坏	SK2	口：(12.0)　高：(3.0)　底：－　最大径：(12.4) 口縁～体部破片 外：橙色　内：にぶい黄橙色／良好	砂粒、石英、チャート	外：口縁部ヨコナデ。体部ヘラ削り。　内：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。
47	土師器甕	SK2	口：－　高：(4.0)　底：(5.0)　最大径：－ 胴～底部破片 灰黄褐色／良好	砂粒、チャート、雲母片岩	外：胴部ヘラ削り。　内：胴～底部ナデ。 一孔の甕。
48	土師器甕	SK2	口：14.8　高：(6.0)　底：－　最大径：－ 口縁～胴部破片 にぶい褐色／良好	石英、チャート、角閃石、雲母、褐色粒	外：口縁部ヨコナデ。胴～胴部ヘラ削り。　内：口縁部ヨコナデ。底～胴部ヨコナデ。
49	須恵器甕	SK3	口：(12.9)　高：(3.1)　底：－　最大径：－ 口縁部破片 灰色／良好	石英、白色粒	ロクロ整形。
50	須恵器高台付坏	SK3	口：－　高：(0.6)　底：　最大径：－ 底部破片 暗色／良好(酸化傾)	石英、角閃石、白色粒	ロクロ整形(右回転)。 外：底部回転糸切り後高台貼付。
51	土師器坏	SK3	口：－　高：(5.6)　底：(8.0)　最大径：(13.6) 体～底部破片 浅黄色／やや良	砂粒、石英、角閃石	外：体部ヨコナデ。底部付近ヘラ削り。　内：ヨコナデ。
52	土師器皿	P11	口：－　高：(2.6)　底：8.0　最大径：－ 体～底部1/2 外：浅黄色　内：黒褐色／良好	砂粒、角閃石、白色粒	外：胴部ヘラ削り。底部ヘラ圧痕？　内：胴～底部ヘラナデ。
53	須恵器坏	IV層	口：(12.2)　高：3.9　底：5.8　最大径：－ 口縁～底部2/3 灰色／良好	砂粒、雲母、白色粒	ロクロ整形(右回転)。 外：底部回転糸切り。木調整。
54	須恵器坏	C2グリッド IV層	口：－　高：(1.7)　底：6.0　最大径：－ 底部 灰色／良好	砂粒、石英、チャート、白色粒	ロクロ整形(右回転)。 外：底部回転糸切り。木調整。
55	須恵器坏	C2グリッド IV層	口：－　高：(0.8)　底：(7.6)　最大径：－ 底部破片 灰色／不良	石英、チャート、白色粒	ロクロ整形(右回転)。 外：底部回転糸切り。木調整
56	須恵器坏	E2グリッド IV層	口：　高：(0.9)　底：5.6　最大径：－ 底部1/2 外：灰白色　内：灰色／良好	石英、角閃石、白色粒	ロクロ整形(右回転)。 外：底部回転糸切り。
57	須恵器高台付椀	E2グリッド IV層	口：－　高：(7.4)　底：9.1　最大径：－ 体～底部 灰白色／良好	砂粒、石英、チャート、雲母、白色粒	ロクロ整形。 外：高台貼付後ナデ。
58	須恵器高台付坏	D4グリッド IV層上面	口：－　高：(4.8)　底：(7.0)　最大径：－ 体～底部1/3 灰白色／やや良	石英、チャート	ロクロ整形(右回転)。 外：底部回転糸切り後高台貼付。

第７表　出土遺物観察表(4)

№	種別 器種	出土 位置	計測値（cm・g） 残存 色調/外面・内面/焼成	胎土	特徴・調整・文様等
59	須恵器 高台付坏	D4ｸﾞﾘｯﾄ ﾄﾞIV層	口：－　高：(1.6)　底：8.5　最大径：－ 底～底部1/2 灰白色／良好	砂粒	ロクロ整形。 外：回転糸切り後高台貼付。
60	須恵器 長坏	D3ｸﾞﾘｯﾄ ﾄﾞIV層	口：－　高：(2.5)　底：(15.3)　最大径：－ 胴～底部片 青灰色／良好	石英、白色粒	ロクロ整形。 箆力削(?)痕。
61	土師器 台付鉢	D4ｸﾞﾘｯﾄ ﾄﾞIV層	口：－　高：(1.9)　底：(8.0)　最大径：－ 底部1/3 黄灰色／良好	砂粒、石英、白色粒	ロクロ整形。
62	土師器 甕	D3ｸﾞﾘｯﾄ ﾄﾞIV層	口：(9.8)　高：(4.8)　底：－　最大径：－ 口縁～胴部破片 橙色／良好	砂粒、石英、角閃石、白色粒	外：口縁～頸部ヨコナデ。胴部ヘラ削り。　内：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。
63	土師器 甕	D4ｸﾞﾘｯﾄ ﾄﾞIV層	口：－　高：(2.6)　底：(7.4)　最大径：－ 胴～底部1/2 外：黒褐色　内：淡黄色／良好	砂粒、石英、角閃石、褐色粒、白色粒	外：胴部ヘラナデ。底面ヘラ削り。　内：胴～底部ヘラナデ。
64	土師器 甕	D5ｸﾞﾘｯﾄ ﾄﾞIV層	口：(15.6)　高：(4.8)　底：　最大径： 口縁部破片 外：明褐褐色　内：橙色／良好	砂粒、石英、チャート、雲母片岩	外：不明瞭。　内：頸部ヘラ削り。胴部ナデ。
65	陶器 碗	撹乱内	口：(11.1)　高：(7.1)　底：－　最大径：－ 口縁～体部1/3 暗オリーブ褐色／良好	灰色	いわゆる瓦当茶碗。ロクロ整形。 施釉。高台内無釉。 18世紀前半以降。
66	陶器 皿	撹乱内	口：12.7　高：3.1　底：7.3　最大径：－ 4/5 淡黄色／良好	灰黄色	ロクロ整形。 絵付形。透明釉。高台内無釉。　瀬戸・美濃系。 17世紀後葉～18世紀前半。
67	軟質陶器 焙烙	撹乱内	口：(38.4)　高：5.6　底：(36.0)　最大径：－ 口縁～底部破片 外：黒色　内：灰色／不良	石英、白色粒、角閃石	土師質。ロクロ整形。18世紀前半以降。外面煤付着。
68	軟質陶器 焙烙	撹乱内	口：(41.2)　高：4.6　底：(38.6)　最大径：－ 口縁～底部破片 灰色／不良	石英、白色粒	土師質。ロクロ整形。18世紀か。外面煤付着。
69	偏平棒状 石器	D5ｸﾞﾘｯﾄ ﾄﾞIV層	長：12.7　幅：7.6　厚：2.6　重：188.0 完形 青灰色		緑色結晶片岩。 古墳時代か。
70	偏平棒状 石器	C5ｸﾞﾘｯﾄ ﾄﾞIV層	長：13.1　幅：4.3　厚：2.6　重：230.6 完形 青灰色		緑色結晶片岩。 古墳時代か。
71	偏平棒状 石器	D5ｸﾞﾘｯﾄ ﾄﾞIV層	長：15.1　幅：4.5　厚：1.9　重：207.6 完形 青灰色		緑色結晶片岩。 古墳時代か。
72	砥石	撹乱内	長：8.7　幅：3.1　厚：3.2　重：108.2 2/3 灰白色		砥沢石。 側面、裏面に加工痕残る。欠損後も使用か。 古代か。

第VI章　まとめ

本遺跡で検出された遺構は、出土遺物と覆土に含まれるテフラを手がかりに大きく３時期に分けられる。最も古い時期が古墳時代後期（６世紀後半頃）、次が古墳時代後期末（６世紀末～７世紀初頭）、最後が平安時代（９世紀後半頃）である。ここでは、検出された遺構のなかでも溝に関して若干まとめてみたい。

溝のうち最も古いSD3は、本遺跡の溝では唯一Ⅳ～Ⅴ層の傾斜に直交する方向の溝である。第Ⅴ章で記したように、遺物から６世紀後半のものと思われる。本遺跡北方に広がる微高地の縁辺を南北に画す位置にあるが、微高地上には下大類蟹沢遺跡で一端が検出された集落遺跡の存在が推定できることから、集落の限界を示すものとも考え得る。この溝では土師器丸胴甕・高坏、須恵器坏が一ヶ所にまとまって出土しているが、その中には故意に底部を抜いたと思われる個体も含まれていることから、何らかの祭祀的行為が行なわれたことが想定される。溝が緩くカーブすることから古墳の周堀である可能性も考慮したが、カーブの内側に主体部らしき痕跡が確認できなかったこと、溝内に墳丘の崩落土や葺石とみられる礫が確認されず、埴輪も出土しなかったことから、その可能性は極めて低いものと結論づけた。

SD3が埋没した後、それと同じ方向に微高地を区画する溝や柵列などの施設は確認できなかった。次の段階に構築されるのは、Ⅳ～Ⅴ層の傾斜に沿う方向のSD2・４である。このうち少なくともSD2は６世紀末～７世紀初頭の段階で半ば埋没した状態であったと考えられる。土師器の坏がまとまって出土していることから、SD3と同様何らかの祭祀的行為を想像することができるが、玉類や石製模造品等祭祀的な遺物が出土していないことから、断定はできない。第Ⅴ章で記したように、２条の溝は西端を除いて平行に近く、その間隔は2.35～2.95ｍ（両溝心々間での計測）を測る。この２条は幅、深さ、断面形状が近似し、加えて、両者ともにⅣ層上面から掘り込まれていること、覆土の主体がほぼ等質であること、底面の所々に段差を有することも共通する。SD4出土遺物にSD2出土遺物と同時期のものはないが、これらの状況から、両者が同時期に構築され、機能していた可能性は非常に高いと考えている。

両溝の性格については、底面形状、及び水成堆積とは思えない覆土の質と堆積状況からみれば、用水路として構築、使用されていたとは考えにくい。集落域等の上地を区画する地境であったと考えるのが現時点ではもっとも蓋然性が高く、その傍証として現代に残る旧地割がSD2・４とほぼ同方向であるということを挙げることができる。第２図にみえる現県道と斜めに交わる北西―南東方向の地割がそれであり、第３図と見比べると、両者が同一方向であることがよく分かる。なぜ２条の溝で区画したかについては不明であり、当該期の集落遺跡や首長居館址の事例でも同様のものは管見に触れなかった。

この２条については調査時から道路側溝である可能性も視野に入れていたが、遺物の時期を考慮外としても、律令期の規格的な道路遺構は側溝芯々間で６ｍ以上を測るものがほとんどで、３ｍ以下のものは見当たらないこと、溝間に硬化面や波板状の凹凸等の路面構造が検出されなかったことから、現状ではその可能性は低いと考えている。なお、群馬県内では、６世紀末～７世紀初頭に比定される両側溝を有する規格的な道路遺構は未検出である。ただし、井野川右岸の複数の遺跡では、時期はそれぞれ異なるもののSD2・４と同様に井野川に平行する溝が何例か検出されており（註1）、調査事例の集積と分析が進めば、区画以外の目的をそこに見出すことができるかもしれない。

SD2・４が埋没した後に構築されるのがSD1である。位置や走行方向はSD2・４とほぼ同じであるが、連続して掘り直されていたのではなく、いったん完全に埋没した後新たに開削されている。にもかかわらず位置・方向が一致しているということは、SD2・４が埋没した後もそこに何らかの境界線が存続したか、そこに土地の境界があるという認識が定着していたことを示している。規模や断面形状が異なるものの、SD1の主

たる目的はSD2・4と同じく土地の区画とみてよいであろう。流水の存在を示す土層が認められなかったため水路とは考えにくく、また、底面の硬化が認められなかったため道路遺構とも異なるようである。覆土の大部分をⅢ層に類似する砂質シルトが占め、比較的短期間で埋没したようにみえる。埋没したのは、出土遺物の年代から9世紀後半頃であろうと推定される。

SD1埋没後に堆積した上位の土層からは、後続するような溝は検出されなかった。しかし、前述のようにSD1、及びSD2・4に関してはほぼ同一方向の旧地割が現在も残存しており、洪水・降灰等の度重なる災害や耕作・造成等の土地改変にあって、位置は多少移動したものの、基本的な地割が900年以上にわたって存続してきたことを示している。また、同時に、遺跡地周辺が条里制施行後も区画の整理が行なわれなかったことが判る。

今回の調査では、溝4条、井戸1基、土坑6基が検出され、各遺構からそれぞれ時期的にまとまった遺物が出土したことから、遺構の時期的な関係が良好に把握できた。それらを概観した結果、古墳時代後期末頃に設けられた土地区画がほとんど形を変えずに現代まで存続した可能性を示すことができた。この結果が今後の研究の一助となれば幸いである。

注1　絵図小林遺跡（大江2007）の古墳時代前期の大型溝をはじめ、鴻貝朝米内遺跡（神戸ほか2002）でも時期不明ではあるが溝が検出されている。また、高崎市教育委員会田口一郎氏のご教示によれば、本遺跡の近傍でSD2・4と同様に平行する溝がみつかっているようである。

【主要引用参考文献】

飯塚恵子・五十嵐　至・田口　一郎　1978 『鈴ノ宮遺跡』 高崎市教育委員会

井波陸夫　1992 「第３章　検出遺物　第２節　Ｂ．陶器」「第３章　検出遺物　第４節　Ｄ．土師」『東京都新宿区内藤町遺跡』 第Ⅱ分冊　東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会

岩崎琢郎・熊谷　健　2001A 『西横手遺跡群』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩崎琢郎・熊谷　健　2001B 『宿横手三波川遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

梅澤重昭・大塚初重ほか　1998 『綿貫観音山古墳Ⅰ　一墳丘・埴輪編―』 群馬県考古資料普及会

大江正行・豊島健一・鎗崎修一郎　2006 『綿貫小林前遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

女屋和志雄・関根慎二　1991 『熊野堂遺跡（2）　まとめ編』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

金井　武　1999 「上滝五反畑遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

神戸聖哲・中村　茂・茂田勝健　1985 『宿大類遺跡群Ⅵ　万相寺遺跡』 高崎市教育委員会

久保泰博　1993 『柴崎遺跡群　南大類遺跡群』 高崎市教育委員会

黒田　晃　2001 「剣崎長瀞西遺跡１」 高崎市教育委員会

小池浩平　2001 「駅路復元ルート図（2）」『古代のみち―たんけん！東山道駅路―』 群馬県立歴史博物館第70回企画展図録　群馬県立歴史博物館

斎藤英敏　2002 『上高根町北遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

坂口　一・三浦京子　1986 「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』24　群馬県史編さん委員会

白石　修・湯浅昭平　1984 『矢中遺跡群（Ⅶ）矢中村東遺跡』 高崎市教育委員会

関口　修・鷲巣宇信　1994 『倉賀野万福寺Ⅱ遺跡』 高崎市教育委員会・高崎市遺跡調査会・日本国有鉄道清算事業団

田口　一郎　1981 「Ｓ字状口縁台付甕の分類と編年」『元島名将軍塚古墳』 高崎市教育委員会

田口一郎　2000 「北関東西部におけるＳ字口縁甕の波及と定着」『Ｓ字甕を考える』 第７回東海考古学フォーラム三重大会資料　東海考古学フォーラム三重大会事務局

谷藤保彦　2002 「上滝榎町北遺跡・上滝Ⅱ遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

角田真也・小泉範明・関口　修　2002 『高崎情報団地Ⅱ遺跡』 高崎市教育委員会

長井正欣・神戸聖哲　1997 『高崎情報団地遺跡』 高崎市遺跡調査会

早川　泉　2007 「総論　古代道路跡発掘の現状と展望」 月刊考古学ジャーナル566号　ニューサイエンス社

東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会 『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』　第８回東日本埋蔵文化財研究会　東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会・群馬県考古学研究所

廣津英一　1998 『柴崎熊野前遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

足野守弘・桜井　衛　1990 『柴崎村間遺跡』 高崎市遺跡調査会

若狭　徹　2002 「古墳時代の地域経営―上毛野クルマ地域の３～５世紀」『考古学研究』第49巻　第２号考古学研究会

山崎　一　1971 『群馬県古城墓址の研究』上巻　群馬県文化事業振興会

結城千尋・高橋　淳・斉藤圭子　1988 『矢中遺跡群（Ｘ）矢中村東Ｃ遺跡』 高崎市教育委員会

大類村史編集委員会　1979 『大類村史』 高崎　大類村史編集委員会

群馬県　1938 『上毛古墳綜覧』 群馬縣史跡名勝天然記念物調査報告第５輯

群馬県史編さん委員会　1985 『群馬県史　資料編４　原始古代４』 群馬県

群馬県史編さん委員会　1986 『群馬県史　資料編２　原始古代２』 群馬県

群馬県史編さん委員会　1990 『群馬県史　通史編１　原始古代１』 群馬県

高崎市教育委員会　1998 『高崎市遺跡分布地図』 高崎市

高崎市市史編さん委員会　1996 『新編　高崎市史　資料編３　中世Ⅰ』 高崎市

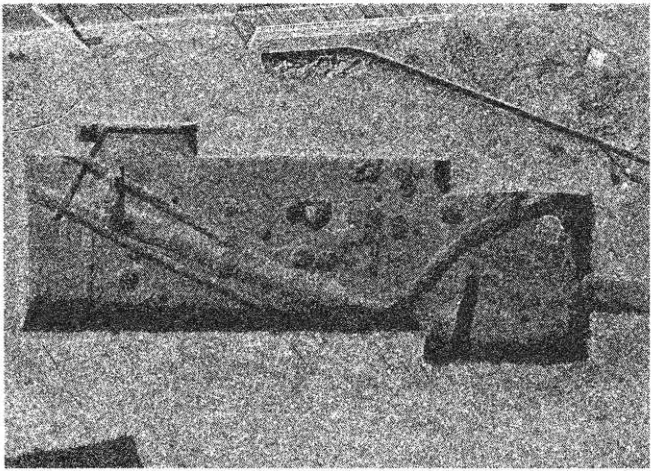
高崎市市史編さん委員会　1998 『新編　高崎市史　資料編１　原始古代Ⅰ』 高崎市

高崎市市史編さん委員会　1999 『新編　高崎市史　資料編２　原始古代Ⅱ』 高崎市

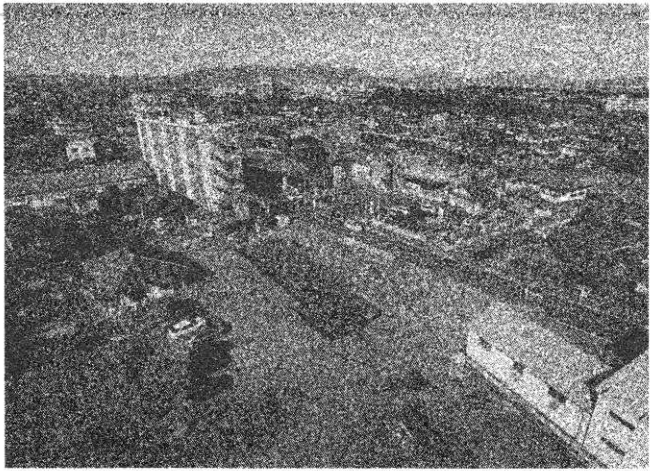
高崎市市史編さん委員会　2003 『新編　高崎市史　通史編１　原始古代』 高崎市

高崎市史編さん委員会　1968 『高崎市史　第三巻』 高崎市

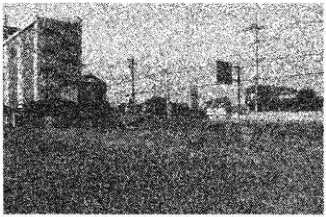
写 真 図 版



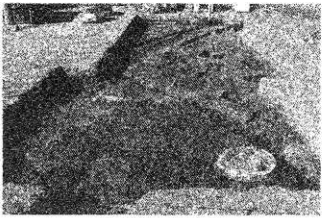
調査区全景（上が北）



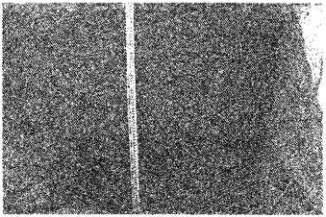
調査区遠景（南東から）



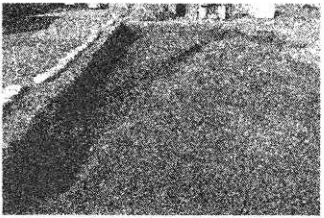
調査前現況（南東から）



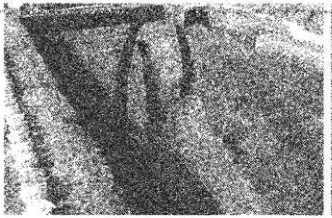
調査区全景（東から）



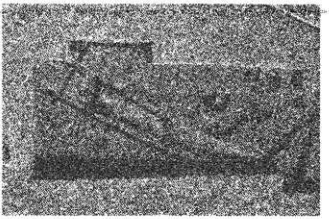
基本土層（北から）



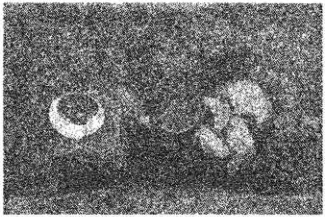
SD1（東から）



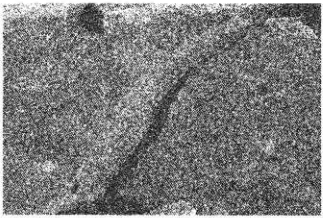
SD2・4（南東から）



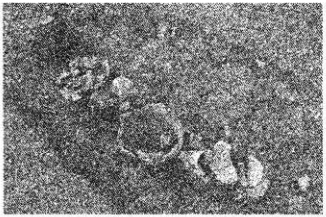
SD1・2・4（上が北）



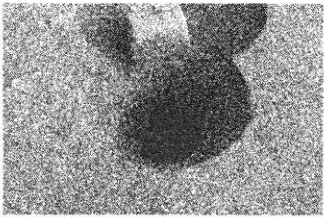
SD2 遺物出土状況（南から）



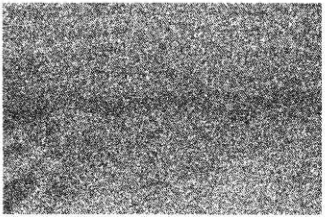
SD3（南から）



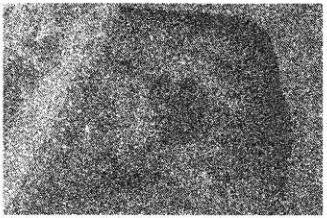
ST3　遺物出土状況（北東から）



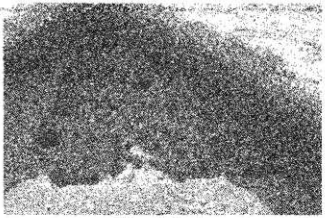
SE1（西から）



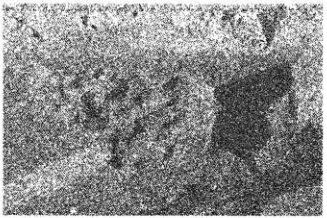
SK1（北から）



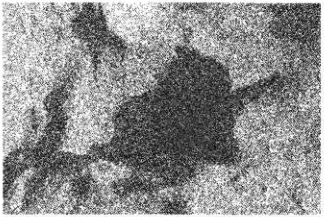
SK2（東から）



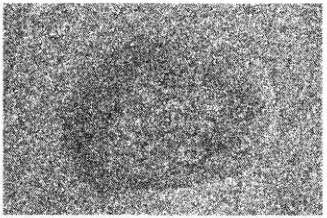
SK3（北西から）



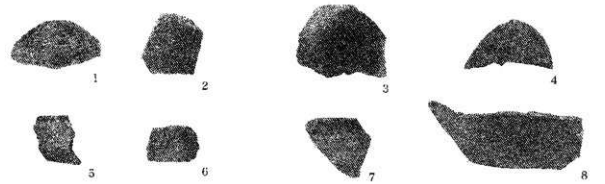
SK4（南から）



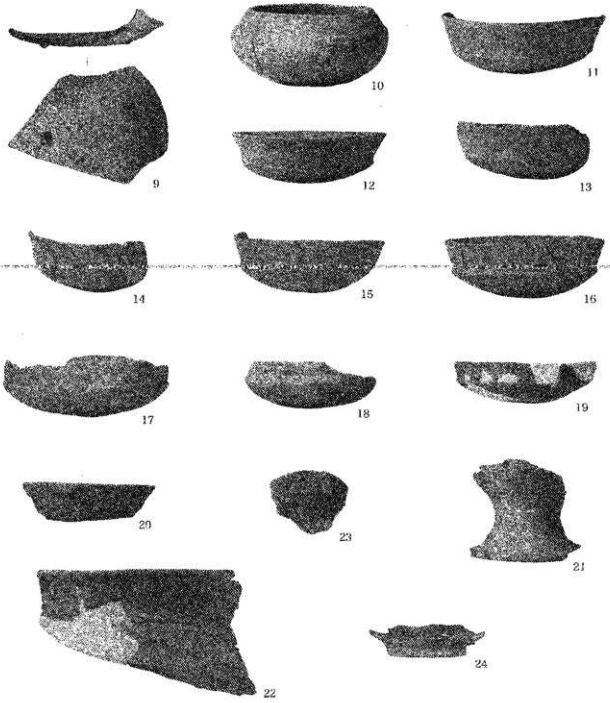
SK5（西から）



SK6（東から）



SD1 出土遺物



SD2 出土遺物

25

26

28

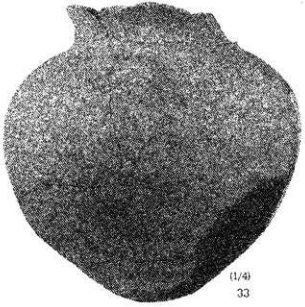
27

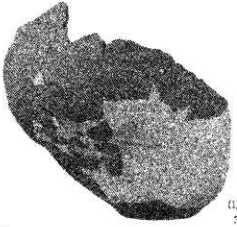
30

29

31

(1/4)
32

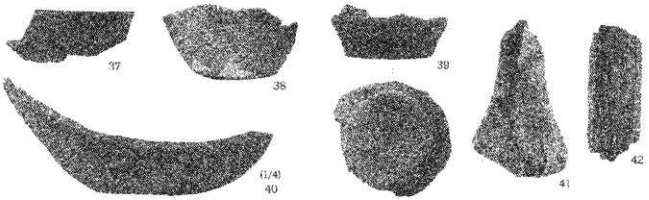

(1/4)
33


(1/4)
34

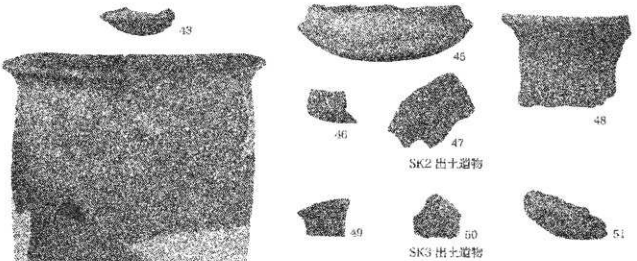
35

36

SD3 出土遺物



SD4 出土遺物

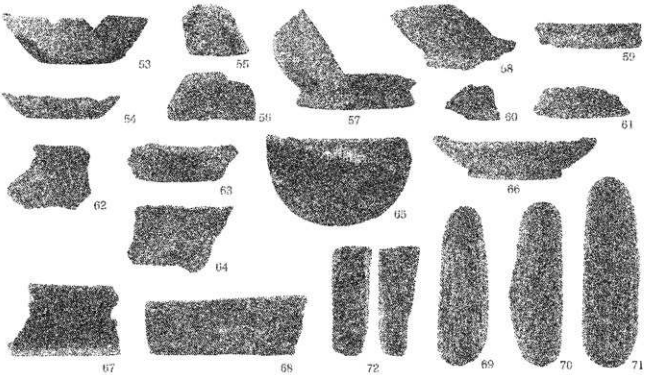


SK2 出土遺物

SK3 出土遺物

SK1 出土遺物

P11 出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

フリガナ	シモオオルイ・ナカミチシタイセキ
書名	下大類・中道下遺跡
副書名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第269集
編著者名	篠崎直史
編集機関	高崎市教育委員会
所在地	〒370-8501　群馬県高崎市高松町35番地1
発行年月日	2010年5月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
シモオオルイ・ナカミチシタイセキ 下大類・中道下遺跡	ガンマチケンタカサキシ 群馬県高崎市 シモオオルイマチ 下大類町 ナカミチシタ 中道下524番地1	102024	462	36°19′06″	139°03′53″	2010.1.6～ 2010.1.26	314.37㎡	集合住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下大類・中道下遺跡	溝・土坑・ピット	古墳時代	溝　3条 井戸　1基 土坑　4基	土師器・須恵器	
		平安時代	溝　1条 土坑　2基	土師器・須恵器	

下大類・中道下遺跡

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

平成22年5月25日　印刷

平成22年5月31日　発行

編集・発行／　高崎市教育委員会

高崎市高松町35番地1

TEL　027-321-1291

印　　刷／　細谷印刷有限会社